

---

# 悪魔の絵本 1 魔術師【逆】 SUIT編?【完全版】

有月 仮字

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔の絵本1 魔術師【逆】 SUIT編？【完全版】

### 【Nコード】

N4966M

### 【作者名】

有月 仮字

### 【あらすじ】

祈りは届かず願いは破れる悪魔が続べるこの世界で。終わりへのもう一つのはじまりの物語。

銀髪に紫眼の混血奴隷 瑠璃椿。彼女は触れるだけで人を殺せる殺人鬼。その力と引き替えに、過去をなくした毒人間。成り行きで彼女の記憶探しを手伝うことになったやさぐれ騎士飛鳥。少女の記憶が戻る時、二人の罪が曝かれる。

設定展開登場人物。主に問題しかない裏本編 SUIT編第一章。目には目を、罪には罰を。邪道街道まっしぐら深読み推奨ダークフ

アンタジー！

0 : P o s t f e s t u m ・ 【少年と棺】（前書き）

ゲームシナリオ書いた後に変わった設定とかを含め最初から1章書き直してみる完全版。

大筋の展開は変わりませんが以前書いた物とは文章などは変わりますので、その辺比較して楽しんでいただけると幸いです。

O : P o s t f e s t u m ・ 【少年と棺】

> i 9 1 4 8 — 3 8 3 <

> i 9 1 1 2 — 3 8 3 <

「この子を守ってあげて、私の代わりに」

それが最初の約束だ。

幼い日の俺にとって、その言葉はあまりに大きく……そして誇らしいものだった。

その日の俺にとつての存在意義。誰かを守ると言うことは、決して隷属ではない。

大人達、その世界に認められたような高揚感。

自分は子供じゃない。そうだ。騎士になれたんだ。

「この目が再び開いたなら……もう二度と、悲しむことも……泣くこともないように」

歌うような女性の声。幸せを祈るような優しい声。

この子が本当に眠っているだけだったなら、それはどんなに良かったか。

それでも彼女がそんな風に言うものだから。あり得ないことだけれど、自分にもそう見えてきた。まるで彼は眠っているだけのよう。眠っている？確かに眠っているのだ。それは間違いない。それが二度と覚めない眠りだという言葉を除くなら。

棺の中、眠る子供は死んでいる。

それを見ている。この場にいる三人共が。

その鮮やかな景色。まだ思い出せる。瞼に、脳に刻まれたよう鮮

明に。

人が死ぬところ。

それを初めて見たのがその日だ。

子供だった俺は死というものをよく理解していなかった。母親は死んだのだと父親から聞かされたはしたが、物心ついた頃にはもう彼女はいなかった。俺を生んですぐに死んだという話だったからそれもそのはず。

だから俺にとって死とは酷く曖昧な物だった。

知らない者を恋しがることはない。街を出歩き親子三人で歩いている子供を見れば、ちょっと羨ましいと思う。父は仕事が忙しく、あまり家には居なかったから。

それでもそれを素直に口に出せるような可愛らしい子供じゃなかった。世間を斜めに見て、わかったふりをしている可愛げ無い子供。それが俺。

初めて見た、その死は衝撃的だった。

可愛げのないガキに、恐れるという気持ちはない。生まれれば、終わるもの。それは万物共通事項。綴った文字が薄れるように、頁を捲った物語がいつかは閉じられるようすべては終わりに流れている。この世界に永遠の者など何もない。それを理論的に知ったかぶりをしている本当に可愛くない子供。

そしてその日、俺は永遠を知った。

その風景は、さながら永遠。死は終わりじゃない。死が、永遠だった。

彼の死は、完成された風景だった。美しい絵画のようだ。

一人一人が目の前で死んでいくというのに、悲しみも恐れもせず、息を呑むようそれを見つめた。その死に俺は魅入られた。

あんなに綺麗な色の人間を、俺は今までもこれから……彼以外

に知り得なかった。

タロツクの黒でもカーネフェルの金でもない。舞うよう風に揺れる銀色の髪。

夜空の濃紺よりも尚青く、けれど血よりも深く赤い色。どれ程の重さの紫水晶を砕いたら、何本董の花を手折ったら……そしてをれを煮詰めて染め上げたなら、あんな色になるだろう。一つの単語で例えるものが見つけれない。それくらい綺麗な紫色の瞳。

あんな人間見たことがない。これが人間？信じられない。どこかの技師が作り上げた人形じゃないのか？そう。自動人形。

白い指先。細くて小さな手。だから彼の持つ杯は重すぎたのだろう。彼の手からそれが滑り落ちて落下する。

その音に弾かれたよう、よろめく彼の口元から流れる赤。その鮮やかな色が彼の白い肌によく映えた。

それが葡萄酒だったのか、違うものだったのか。あの日の俺はわからなかったが、彼が苦しそうだと言うことは見て取れた。

咽せたように咳き込む仕草、表情。漏れる声。そのすべてが心の琴線を掻き鳴らす。

なんて出来の良い人形だ。まるで生きているみたいだ。

それでもやはりそれは人形だった。彼は床へと倒れ込み、僅かに動いたその指も……やがて完全に動かなくなる。

けれど、そうなる前に一度だけ……人形と目があった。彼には此方が見えていなかったかもしれない。かれの視界は定まっていなかったように見えた。

人形の両目からはボロボロと涙が流れていた。何が悲しいのかわからなかった。人形も泣くのかと、そのことに感動した。

その人形は、とても綺麗な色で愛らしい姿をしていたけれど。それでも完璧ではなかった。

人形は上手く笑えなかった。

目が伏せられていく。その前に、人形は穏やかに微笑しようとし

た。笑おうとした。けれど彼は泣きながら笑うから、それは成功しなかった。

それを見て俺は、その不完全さに胸が締め付けられるような感覚に襲われる。

人間になりたいと人間を演じ、そしてそれにあと一步届かなかった。そんな哀れな生き物用に見えたのだ。人間何かよりずっと綺麗に見えるのに、彼はどうしてそんなに人になりたかったのか。

完全にその目が閉じて、……会場は静寂に包まれる。

彼が動かなくなるまで、眼を逸らせなかった。彼が動かなくなっても、惚けたようにそれをじっと見つめていた。

そこにいた人間の、きつと誰もがそうだったに違いない。余韻から抜け出せずにいた。

その余韻の中、ほうと息を吐いた人間は大勢。それが彼の死の異常さを雄弁に物語る。

彼は唯死んだのではない。殺されたのだ。

けれど人々は、まだ勘違いしている。ここが未来の殺害現場だと知りながら、足を運んだ癖に、自分たちが今見たものは何かの劇の一部分だと脳は錯覚している。

もしもここで幕が下りたなら、会場は沢山の拍手に包まれるだろう。

終幕の合図は幕ではなく男の声によって告げられた。待ちわびたカーテンコール。人々は熱狂し……そしてようやく夢から覚める。

アンコールはない。殺された人間を、もう一度殺すことは不可能だ。

そう、ここは劇場などではない。処刑場。

俺も思い出す。彼は人形などでは無かったのだと、ようやくここで。

\*

「アスカー！あさー！」

「……………ぐえっ」

子供の体重はそんなにない。けれど思いきり腹の上で飛び跳ねられたら話は別だ。鳩尾入った。

「起きた？」

激痛に悶えている飛鳥をのぞき込む少女。というか幼女（11）。長い桜色の髪に赤い瞳の混血児のアルムだ。少々幼すぎる気はするが、見た目も中身も可愛らしい女の子ではある。唯、時折こう……………なんというか問題を引き起こす。天然故、質が悪いとも言いが。本人が本当に無邪気で全く悪びれないのがまた、脱力を誘う。

「ああ。起きた起きた。もうちよいで永眠するところだったけどな」

「えーみん？」

「……………にしてもうちのお姫さんはとんだお転婆だな」

自分には地下室の寄生虫のように幼児性愛の趣味はないが、眠りからの帰還はもっと夢見てもいいんじゃないかなろうか？

そうだそうだ。腹上ジャンプ鳩尾落としなんて技を食らうより、誰だってお早うのキスとかの方が嬉しいものだ。絶対そうだ。

もつとも相手にもよるが。もしそんなことをしたのが野郎だったり加齢臭の漂う中年男だったりガチムチマツチヨな兄貴だったり髭面の爺とか口臭のきつい婆だったり……………そんなことがあったなら、

問答無用で半殺しにして慰謝料請求した後本殺しにする。

もしかしたら奴隷貿易に手を染めてどこかへ売り飛ばすくらいするかもしれない。兎に角そんな展開はお断りだ。グロ過ぎて発禁になる。

話を戻そう。それで、だ。相手はこの女の子。恋愛対象としてはストライクゾーンから外れているこの幼女でも、まあ嫌だとは思わない。可愛い女の子にキスされて嫌な野郎なんかまずくない。いるとしたら完全にあっち側の人間だろう。

窓とカーテンを開けて部屋から出て行くアルムを見送り、欠伸をしながら朝の空気を取り入れて、ぼんやりと飛鳥は思う。

俺にももう少し穏やかな朝というものが合っても良いんじゃないかと。ていうか俺は確か部屋の鍵を掛けたはず…………

いや、寝惚けているな。そうアスカは思い直した。彼女はこの宿の従業員だ。マスターキーくらい店主から借りられる。それに知らない仲でもない。今更だ。

仕事に遅れないよう起こしに来てくれる彼女は、人間目覚まし時モーニング計みグーグルたいなものなのだ。

「しかし今のでHPぜったい100くらい減らされたよな」

怠い。二度寝したい。だが、朝飯は食べなければ勿体ない。それに今日は依頼が入っている。それもこれもそうだ全ては金のため。

この無法王国セネトレアで生きるも死ぬも、全ては金次第。金金金金。金が足りない。働かなければ。

「ふぁ…………顔でも洗うか」

鏡に映る自分の顔。幼さも大分抜けてきた。親父に少し似てきたかもしれない。そう思って苦笑する。似ているのは色だけだ。緑の

瞳と金色の髪、それは父親譲りの色だ。

「俺のが悪人面か……？いや親父も目つきは良くなかったよな」

それでも内面の違いか。彼の方が人が良さそうに見えたとし、実際人が良かった。一方自分とは言えば……お世辞にもそうとは言えない人間だ。まず職種がアウト。

飛鳥の職は請負組織アソシエイト。請負組織は裏町の破落戸みたいなもの。

仕事としては組織によって差違あれど、依頼を受ければ犯罪すれすれのことを引き受ける……闇の世界の人間だ。それぞれ組織によって専門分野が異なつて、客はその道のエキスパートに依頼をしに行く。

飛鳥の場合は、基本的に何でも屋。ある程度の報酬が与えられるなら、仕事は断らない。それでも命あつての物種。やば過ぎる山には乗らないし、西裏町で仕事をやる身として……仕事の都合上困るので奴隷貿易には手を出さない。

自慢じゃないが、そこらの破落戸よりは腕が立つ。剣の腕には自信があつた。だから何でも屋とは言つても護衛、警備、害獣駆除……どうしても戦闘関連の依頼が多いのはご愛敬。他に向いてる職もないから仕方ない。

多少の擦り傷切り傷は年中負うが、そうそう文句ばかりも言つていられない。自分はこの国で、どうしても手に入れたいものがあるのだ。

(そつだ。もうちよいなんだ)

大分貯まつた。もう9年も金稼ぎしてるんだ。

酒薬煙草ヤク、ギャンブル女も我慢して……いや、たまに酒は飲むけど。ここ酒場だし。そんな高いのは頼まない。

ギャンブルは……自分のリアルラックのなさにすぐに気付いて止

めた。地道に稼いだ方が向いていると悟ったのだ。金は灯りだ。すぐに虫が集る。一攫千金は危険。ハイエナ共に路地裏に連れ込まれジャンプさせられ身包み剥がされるなんてこのセネトレアでは日常茶飯事。かつあげ、追いはぎ、そのくらいならまだ良い方だ。自分は稀少な人種だから殺されるまでは行かないとしても、最悪奴隷として売り飛ばされる。

そうなたらちよつと想像したくもない展開が待ち受けている。運が良ければ貴族の家の跡継ぎ養子。運が悪ければ………加虐趣味の変態貴族の飼犬です、本当におめでとございます。ああ、恐ろしや。

セネトレアという国は、それだけ危ない場所。正義も悪もあつたものではない。

全ては金と、力。

力が金に代わり、金が力に替わる。力があればいくらでも金を稼げるし、金が在れば弱くても護衛を雇って安全を得ることが出来る。けれどそのどちらもない人間にとって、ここは地獄だ。弱者は、標的。狩られる側だ。

城は金稼ぎしか行わない。王にとっての不利益を起こさない限り、国から追われることはない。例え、人を殺してもこの国では罪にはならない。奴隷を売っているような国だ。人の命さえ金で贖える汚れきつたそんな世の中。

勿論金を積めば死人が甦るとか、そんな魔法みたいな展開はない。所詮世の中そんなものだ。命が買えるとは、いくらでも換えが利く。そういう意味。金を出せば新しく嫁でも妾でも恋人でも愛人でも養子でも幼女でも何でも買える。

商業国セネトレア。ここでは金で買えない商品は何もない。金さえあればどんな者でも贖える。

このベストバウアーという街は、セネトレア第一島に位置する世界貿易の中心地。金の亡者の悪徳の都にして世界の市場と名高いセネトレア王都。ある者には最っ高。ある者には最っ低。そんな矛盾

した街である。

しかし……そんな最低な街にも、潤いはある。

朝食の良い匂いに釣られてふらふらと階段を下ると、聞こえる女の声。

「何、朝っぱらからにやにやして。気持ち悪いわね」

金色の髪に青い瞳のカーネ费尔人の少女。彼女はまだ16だがこの……宿兼酒場兼定食屋である《影の遊技者》を一人で切り盛りしている商売上手。

本人がはきはき物を言う正確なのと、しっかりしているせいもあり、彼女の方が年下なのにお姉さんっぽい印象。

邪魔と言いたげに結われている髪はそれなりの長さがあって、解けば年頃の娘さんに見える。出るとこ出て、しまるとこしまつてスタイルもそれなりに良いのだが、蠱惑的とか肉欲的な魅力とは程遠い、分類するなら健康的な色香の持ち主だ。料理の腕は確かだし、心配りの出来る子だし、嫁にしてみず損はしない。ていうか好みだ。そして何より彼女と話しているのは楽しい。気張らずに済む。

飛鳥にとってこの店はセネトレアでの家。物騒なこの国の中で、唯一心落ち着ける場所が彼女とこの店。妹とも姉とも違うが、家族のような親しみを感じている。

それは独りよがりではないはずだ。飛鳥に対するこのぞんざいな扱いは、彼女なりの親しみから。ここに世話になってから随分経つ。彼女の父親がここを経営していた頃からの付き合いだ。半ば幼なじみのようなものだと言っても良い。

そう。彼女こそこの最低な街における心のオアシス……

「何かあんた今絶対薄気味悪いこと考えてるでしょ？アルム、あんな何か変なところ踏んづけた？下腹部的な」

のはずだが、朝っぱらから容赦のない言葉責め。いや、別に嫌いじゃない。

これは彼女の親しみであって、そう愛ある言葉だ。愛は時に厳しく荊のような痛みを持って……

(……ってほんとに俺今日おかしくね?)

思考回路の暴走具合に、思わず自己ツッコミ。

夢見が悪かったからだろうか。どうも本調子じゃない。寝惚けているというか頭の螺子が一本外れた感じだ。いやもしかしたらあの鳩尾クラッシュの後遺症という可能性もあるにはあるが。

「あんだとうとう何かやばい趣味に目覚めちゃった？」

「ディジッター……流石にそろそろ酷くね？」

此方を気遣い半分不審半分で窺っている店主ディジッター。彼女のこの明るい海の浅瀬のような青い目は本当に綺麗だ。それが劣性遺伝と知っても、自分も青眼に生まれたかった。彼女を見る度そう思う。

二重の溜息を吐くと、からと彼女がくすくす笑う。

「あ、やっと戻った」

「戻ったって何？」

「だってあんだいつもはもっと五月蠅いじゃない。くたたくたくたくだべらべらべらべら手も動くけどそれ以上に口も動いてるみたいな」

「そっか、それなら目覚めさせられたのかも知れないな。だけどそれはアルムにじゃなくてディジッター。お前の言葉で俺は」

「はいはい、寝言は寝て言いなさい。ご飯冷めるわよ？」

「ディジッター冷てえ……俺がほんとにMに目覚めたら責任とって付

き合ってくれよ」

「馬鹿言わないでよ。勝手に目覚めた奴が悪いのよそんなの」

「じゃあ俺がよりSを開花したら付き合ってくれね？」

「何でそうなるのよ」

「俺の推理ではディジットはSの皮を被ったMだ！だからM男とは付き合えない」

「な、何でそうなるのよ!？」

「動揺している。怪しいなあーディジットさん？」

「わ、私は好きな人いるし！あんたなんかお断りよ」

「ああ。あいつか。あの野郎の何処がいいんだか。根暗だし嫌味だし口悪いし性格最悪だしいいとこなしだぜ？家賃だつて払ってないようなもんじゃないか。そのくせ三食しっかりディジットにたかつてやがる」

「……先生にだって良いところはあるわよ!」

「どい?」

「……か、顔？」

「……」

思わず吹き出した。そのまま口を押さえて笑いを堪えていると、彼女が顔を赤くしながら抗議してきた。

「……な、何か文句ある？」

おそらく理由は別だろう。唯、彼女は言いたくなかったのだ。それで適当にそれっぽいや理由を挙げてみた、的ない。何を今更恥ずかしかることがあるのか。

人のことは言わずに言つ癖に、自分のこととなると彼女は途端にコレだ。まあ、それが可愛いくてついついからかいたくなるのだ。

別に本気で口説いているわけじゃない。これが自分たちにとっての日所会話なのだ、何時からか。確か彼女がああ男に惚れていると

知った辺りから、自分はこうなった。

今まで9年も一つ屋根の下で暮らしてきたというのに、後から現れた胡散臭い男にその幼なじみを奪われるというのはとても気に入らない話。

そりゃあの根暗男には渡したくないし、渡すくらいなら口説き落としたいとも思うが、彼女の想いを尊重したい気持ちはある。その相手がどうしてあんなクソ野郎なのかとは小一時間問い詰めたくはあるにはあるが。

そんな複雑な思いと拗くれた性格のせいで、親愛なる彼女をからかうのはもはや日課だ。

「自慢じゃないが俺もそこそこ顔には自信があるんだが」

「私のタイプじゃないのよねえ。それにあんたアスカだし」

「ちょ……！存在からしてアウトかよ俺！？」

そしてそれを冷たくあしらうのが、彼女の日課だ。

「わかった。それじゃあこれは俺とディジットの仲だから語るが……実は俺は某国のやんごとなき方の血を引くわけあり王族で、俺と結婚した暁には晴れて玉の輿に」

「ごめん、興味ないわ。ていうかあんた冗談も程ほどにしないさい

「よ

「ですよねー……」

すたすたと調理場に戻る店主と、肩を落とした飛鳥の姿に他の客がけたけた笑う。

「また振られたなアスカ」

「うっせー……」

「……しかし彼女、カーネフェリーなのに本当変わってるよな」

客の一人がそう呟く。

カーネフェリー……金髪人種のカーネフェル人という意味だ。それで言うなら飛鳥もディジットもカーネフェリーに分類される。その時々によつてこの言葉は侮蔑になつたり親しみのある愛称になつたり忙しくオールマイティな単語だ。

前者の場合、農業国のカーネフェルを馬鹿にする意味。広い国土と温暖な気候。それに培われた陽気なお国柄のせいである。気が抜けているように舐められがち。実際昨今の偏つた少子化のせいで男児の出生率が減り、女ばかりが増えて……軍事力も落ちている。敵国タロツクとの戦争が再開したらやばいとは、たぶん誰もが感じている。

後者の場合、カーネフェル人が「俺達」という親しみを込めて使う言葉。カーネフェル人ではないタロツク人や混血でも、敵意を持たずに親しみを込めれば「君達」「お前ら」と言つた砕けた言葉に変わる。

友好的に使う分には問題ないが、嫌味を込めればすぐさま差別用語に変わる何とも忙しい言葉。同様にタロツク人をタロークと呼ぶのもこれと大体同じ意味。

「ん、ほらディジットはセネトレア生まれだから。」

カーネフェルはセネトレアに苦汁を舐めさせられてきた。

金に無頓着な国民性故、新興国に過ぎなかつたセネトレアに大いに力もられたのは歴史にまだ新しい。

その貿易摩擦に苦しめられ、……セネトレアとは関わりたくないけれど武器を買わなければタロツクとの戦争に負けてしまう。強い武器がタロツクに流れたら、自分たちもそれを買わなければ。買うためには金が要る。だから底値と知れても作物を、自然を売り渡すしか術はない。自分たちで作る武器よりそれは遙かに性能が良いの

だから。

セネトレアは平和を騙り、自分たちが戦うことはまずないが、武器を作ることは止めない死の商人の国。金のためなら何でもするの  
がセネトレア風。

何百年とそんな事ばかり続いたので、カーネフェルの女達は金に  
五月蠅くなった。

そしてカーネフェル男子の少子化。それが玉の輿という風潮を生  
み出した。カーネフェル人の女は過剰供給。故に奴隷としての価値  
は低く価格も安い。

だから彼女たちは金を愛し、憎んでいる。それが典型的なカーネ  
フェル人の女の子像。

ディジットはそこから大分離れている。飛鳥が彼女を気に入っ  
てるのもその、らしくなさから。今時そんな人間、滅多にいない。

「アスカさんは今日はどうしますか？」

「おうエルム、今日のメニューは何だ？」

カウンターの席に着いた飛鳥の傍に寄ってきたのは赤毛の少年。  
桜色の瞳には、うつすらと六条の光が宿る。片割れの姉のアルムの  
方が深い色の眼だから分かり易い。彼女の瞳はスタールビー。エル  
ムのそれはガーネット止まりだろう。

落ち着いた声、丁寧な言葉遣いにその物腰。似てない双子とはよ  
く言ったものだ。

こっちのしつかりしているエルムの方が弟だと言うのだから世の  
中本当によくわからない。同じなのは……たぶん身長くらいのもだ  
ろう。

「今日はタロツク料理だと紅鮭定食。カーネフェル料理だとオムレ  
ツと焼きたてのパンが」「たまにはカーネフェル料理もいいな。そ  
れじゃあ今日は」

「はい、そう言われるかと思ひまして焼いてました。すぐに用意でき……」

エルムの言葉を遮るように、爆音が鳴る。後ろの調理場から。

「エルムちゃああああん……」

けほけほと咳き込みながら現れる涙目の姉アルム。それを見て、さっと顔が青ざめる弟エルム。彼は早くも爆音の意味を悟ったようだ。

「何、姉さん？……まさか」

「あのね、……ひっく、あの………うっ」

エルムは泣きながら抱き付いてくる姉をどうしたものかと両手を彷徨わせ、それを引きはがすよう彼女の肩へと手をついた。

「落ち着いて。それで姉さん………僕なんて言っただけ？」

「オーブン見ててねって」

「それで？」

「見てたら……なんかね、爆発した」

その脈絡のない会話文に、アスカは癖となりつつあるツッコミを我慢するのに神経をすり減らす。セネトレアにはツッコミどころがあまりに多い。その異様さの中で暮らす内、自分が信じた常識という固定概念を守るためには、そのスキルが必要不可欠だった。そうしなければ正気を保てない。

しかし子供にあまり容赦のないツッコミは厳禁。怒っているわけではないがそういう風に思われても困る。子供を泣かせるのは後味が悪い。それにディジットに叱られる。

そんな葛藤の中、目の前では双子の会話が続けられている。

「……………そっか、見てたんだ」

「うん。約束通りちゃんと見てたよ？」

「ところで姉さん。僕こつも言わなかったかな？見てて表面が焦げた所で火を消してデイジツトか僕に知らせてって」

「うづ……………言った？」

「……………また、忘れたんだ……………はあ」

重いため息の後、エルムの視線が飛鳥へ向けられる。どうやら話は終わったようだ。こつ言ったら何だが、これは日常茶飯事。アルムはどこか抜けているためよく失敗をする。本人は頑張っているのが解るので周りにはあまり責められない。

エルムはすまなそうな顔をしているが、彼の責任でもないので責められない。

「すみませんアスカさん。料理変更です。このままじゃオムレツと発癌性暗黒物質定食になりますので。タロツク料理でいいですか？」

「ああ……………ここの料理はどつちでも美味いからな。気にはしないぜ」

唯、これから仕事で動き回るにはパン食の方が胃もたれしないかと思っただけだ。

タロツク料理自体は好物だから、嬉しいと言えばまあ嬉しい。飛鳥はそう思うことにした。

セネトレア第一島ゴールダーケン。この島に残された自然はそう多くない。値段の付く物でそれが誰かの所有物でないのなら、奪って奪って売り払う。セネトレア建国当時の暗黒時代の爪痕は、今にもこうして刻まれている。

今商人達が木を切らなくなったのは、もつと質の良い木材がカーネフェルから安く手に入れられるから。遠い海の間こうから運んできた方が、目の前の木を切るより金がかからないとはなんともおかしな話ではあるが、人を雇って木を切らせ、街まで運ばせる方が金がかかるということだろう。

そんなこんなで野放しになった山々は荒れ放題。それを手入れし、人が暮らせるくらいまでに戻したのが裏町の住民だ。

そして今飛鳥が立っている緑の森。そこには人以外のものも暮らしている。これまではそれでも良かったのだが、これからはどうにもそうはいかないらしい。そこには人がこの場所で生きるのに不都合なものが住み着いたのだ。城の裏側に連なる山脈。その向こう、東側に暮らす商人達が山を再び切り開き始めたのだ。

木は要らないが、土地は居る。金がある人間にとってここは楽園、都付近の地価は高い。商人組合の管理下にある土地を金で贖い、それを更に高価に売りつける。相場を知らない人間はそれにまんまと騙される。例えば他国の貴族とか。

治安は最悪で物騒とはいえ、ここは世界貿易の中心地。安全も金で贖える。その買い物の際に利用する屋敷があっても困らない。

西と東は表通りを境に隔てられ、それぞれに暗黙の了解がある。

だから商人達が西の裏町に入り込むことはない。同様に、西の住人が東に踏み込むこともない。生き方が違う。もはや別の国と言って良い。そこに踏み込んでどうなっても文句は言えない。

西へやって来た人間は身包み剥がされ金品強奪されるだろうし、暴行を受ける程度はあるかもしれない。東へ行った人間は奴隷商に売り飛ばされるか最悪彼らの配下に殺され、パーツとして商品覧に並ぶことになる。

結論として何を言いたいのか。それは、こうなったのは東側のせいでということだ。直接踏み込まなくとも間接的に問題を増やしてくれる。

「まあ、お前らも生きるためには仕方ないよな。ああ、それくらい俺もわかる」

飛鳥は柄に手を掛けながら、目の前のそれに話しかける。勿論会話などは成り立たず、それはぐわあだのしぎやあだの人の言葉でどう表現したらいいかわからない威嚇の声を発する。面倒臭いのであるqwse drft g yふじこI p ;とでも表記しておこう。まあ、大体そんな感じに返答された。

「だが、いいか？ここはセネトレアつつ国だ。世界で一番金に五月蝨い場所だ」

金さえ払ってくれるならそれは客。例えそれが人間でなくとも彼らは商品を売るだろう。

言うなればこれ達の罪状はこそ泥のようなもの。

もつともこの無法王国で盗みは罪にはならない。そのまま逃げおせる力とか、追っ手を打ち負かす力があれば彼の勝ち。今飛鳥が対峙している相手は、その力を持っていた。

それでも罪は誰かが裁かなければならない。国がそれを裁かないのなら、こうやって飛鳥のような者が雇われる。自分自身が完全な正義だとはまず思わないが、金のためならたまには正義っぽいこともする。

その相手が威嚇はしても、襲ってこないのは相手の間合いに踏み込んでいないから。

飛鳥はゆっくりその間合いを詰める。そして一步、その境界を越えた。

「金は対価だ。それがねえんじゃ……払って貰うしかないよな、てめへの命で」

襲い来る獣に飛鳥が柄より抜き払うは、愛刀ダールシュルティング。わけあつて柄はそれなりに重いが、剣自体はそこまでもない。それでも長剣だから短剣よりは遙かに重いわけだけど。

この剣を手にして9年目。昔は一振りするにも体力をすり減らしたものだ、今はそんなんでもない。

背も伸びた。筋力だつて付いた。手だつて昔よりでかくなった。それでも変わらないことが一つ。常に危険と隣り合わせの生活をしていたからか、食べる以上に走り回らなくてはならない忙しさからだったか、自然と身につけた逃げ足の早さ。その素早さは別に逃げる方向だけに使わなくても良い。

そのスピードをもつて、相手の攻撃を刀で受け止める。

飛鳥が盾を持たないのは、この剣一本在れば十分だからだ。攻撃は最大の防御とはよく言うが、この場合ちよつと意味が異なる。勿論その意味もこの刀は持っている。

しかしダールシュルティングはその逆の意味も併せ持つ。防御は、最大の攻撃。

「……っ悪いな！」

受け止める力を強くし、一步踏み込み、斬りつける。斬るといふよりは決る。そんな風に傷を負わせる。

致命傷には至らない。そう思っただろう。その獣は人間を、飛鳥

をよく知らない。

森の緑から空の青へと。瞳に映る景色が変わり、揺らいだことに戸惑っている。でも大丈夫だ。すぐに何も迷えなくなる。

まずは一匹。

人間なんて弱い生き物だと彼らは思っていたのだろう。仲間を一匹失ったことをまだちゃんと理解できていない。

それはそうだ。実際人間は弱い。それでも人は強かだ。

「勝てば官軍って言葉……お前らには理解できねえか」

力こそが全て。力が正義。それが自然の掟。強者こそが生きる法。それはこのセネットレアでも買わないのだろうが、人と獣……そこです。一つだけ違うことがある。獣は正々堂々、それが生き様。だけど人間は姑息も卑怯も褒め言葉。勝った者勝ち。

未知への警戒から距離を取ったままの残りの標的に、飛鳥は愛刀を戻し、代わりに右と左にそれぞれ四本……計八本のナイフを掴む。そしてそれを風へと乗せて相手へ飛ばす。

攻撃を仕掛けられた反射で、獣たちが襲い来る。それを見越してまた投げる。

ナイフの数は目くらまし。一つ当たればそれでいい。

それが掠ったのを見届けて、飛鳥はそれに背を向け加減しながら走り出す。それを見た獣たちはようやくよく本調子。

追われれば逃げ、追い詰められれば襲い、逃げられたら追う。それが彼らの本能だ。

しかし、そう急な運動はあまりよくない。例えば、毒を食らった身体なら。

「ま、こんなもんか」

追いかけてきていた足音はしばらく走ればすぐに消えた。振り返

れば二匹の獣が倒れている。まだ息はある。当たり前だ。今のナイフに塗った毒は最初の猛毒とは訳が違う。動きを止める程度のモノだ。

それを見て、もう一度ダールシウルディングを鞘から抜いた。それを二回振り降ろせば、死骸は最初のをに入れて三匹。これで依頼完了。

動かなくなつた獣。それを普通に獣と呼ぶのはどうだろうか？かと言つてそれは人ではない。

世界を脅かす昨今の数値異常。環境破壊というか天変地異といつか何というか。この獣たちはそれが生み出したものだ。

大昔にどこぞの学者が言つてのけたよう、“万物は数である”、がこの世界の理だ。

人も獣も、土も水も風も空気も空も。全ては0から9までの10の数。その膨大な桁の組み合わせで構成されている。

人の思考も感情も数値によつて表すことが可能。勿論遺伝情報なんかも突き詰めれば数値。

だから数値異常は、これまでの常識を覆すようなことばかりを引き起こす。

魔物退治と依頼された今回の仕事の標的。

魔物なんて呼ばれてはいるが、元は普通の動物だ。それが数値異常を来し突然変異を起こして巨大化したり顔が増えたり足が増えたり。外見以外の例を挙げるなら、知能や力が増して悪さをするようになる。他にも凶暴性が増したりと言つた異常も報告されている。だが、全てがそうだというわけではない。

一つフォローするならば、身体が大きくなれば食べる量も増える。環境破壊の著しいセネトレアでは自然での食料も豊富とは言い難く、人里に降りて畑を荒らすことになる。

元はと言えば人間が悪い、そういう話になるのだが、山を切り開いたのは商人だ。そのとぼちりを受けるのが農村の人間だと言う

のは不条理だ。彼らもこのセネトレアで生きるためには食料を生産し、生計を立てなければならぬ。どんな背景があろうと、害獣は害獣。それが大きさ、知能と力を付けたため普通の罫では始末できず、退治に出かけた村人が返り討ち。

国は金儲けにしか目がなく、平民がどうなるかと知ったことではない。裏町界隈は教会兵の管轄からも外れる。街から離れた山里に位置するこの村も、一応分類するならばストバウアー西裏町。

裏のもめ事は裏で処理する。そのためにあるのが請負組織。それで手を焼いた村人からその依頼を飛鳥が引き受けた。そういう形になる。

「本当は本気で戦ってやるのが餓なんだろうけどな、俺の趣味じゃないんだよ」

運が悪かったなと、死骸に語る。

面倒臭いのは嫌いだ。誰だって危険は少なく楽しく金儲けの方が好き。余程の馬鹿かバトル馬鹿か戦闘狂でも無い限りそれが普通。飛鳥は自分がそういう意味では至極まともな人間だと理解している。命あってこそその、金。

カーネフェル人の男が稀少とは言え、自分に変わる価値の人間は居る。それでも、その人間は飛鳥ではない。死は記憶の終わりだ。約束を途切れさせること。それは許されない。その前に、やらなければならぬことがある。だから、これでいい。

森に背を向け、依頼人の待つ村まで戻る。退治を追えたことを伝えると、彼らは安堵の息を漏らした。これが本当に慈善活動なら気分が良かったんだろうが、こちらでも生活がかかっている。タダ働きをする気はない。裏家業とはいえ、これも商売。依頼遂行の確認をしてもらうまで、先に報酬の話へと移った。

「とりあえず言われた奴は始末した。何かあつたら、TORAの方へ連絡してくれ」

「はい、それでは報酬の方はTORAへと振り込めばいいんですね？」

「ああ、頼んだ」

TORAというのは請負組織の名前。飛鳥の組織ではない。西裏町を統べる大所帯の機関の名前だ。

分類は情報請負組織という風変わりなその組織。その名の通りTORAの扱う商品は情報という媒体だ。

個人や中小請負組織に仕事の斡旋もしてくれるし、金さえ払えばどんな情報でも教えてくれる。逆に情報を売ることも出来る。

その情報を守るための警備は怠らないその組織の建物が、西裏町で一番安全な場所かも知れない。

一体どんな技を使っているのか知らないが、その組織の頭が生み出したシステムはセネトレアの表も裏も世話になっている。

セネトレアで現金の持ち運びは危険。奪われる可能性がある。

だから多くの人間はその安全な場所へ金を預ける。そして依頼契約があれば、TORAが依頼人の通帳に情報として記載されている数値を、請負人のそれへと指定された金額を移動させるわけだ。現金でのやりとりより、お互い安全にスムーズに取引が出来る。

TORAは銀行を営んでいる情報屋。そんなところだろうか。それに世界で最も安全な、という形容詞がつくかもしれない。

しかしそんな便利なシステムを利用するには条件がある。

まずTORAという組織に加盟し傘下に入らなければならぬ。保護して貰うには仕方のないことだ。

登録は無料だが、名前、顔、年齢、人種、職種。そんな個人情報 TORAに預けることになる。これが条件の一つ。

そして二つめ。“ 奴隷貿易に荷担しないこと”。これが大きな事件だ。

セネトレアに置ける奴隷貿易とは二つの意味がある。

まず一つは純血奴隷の売買。

これは隔たった少子化が生んだ不幸。タロツク人は年々女が生まれなくなり、カーネフェル人は年々男が生まれなくなった。これにより黒髪の女、金髪の男奴隷は高価。逆に黒髪の男、金髪の女奴隷は毛ほどの価値もない、ダース売りでやっと思いの付くの商品だ。

高価な人間は、貴族の家に養子に買われ跡継ぎだの嫁だのとして宛がわれるが、価値のない人間は違う。使い捨ての命。労働資源として酷使される。不眠不休、食事も一切与えない。そんな主人の下に送られる奴隷も大勢いる。

そんなことになった原因は、言うまでもなくこの国セネトレア。最初にセネトレアの商人は武器を作った。船を造った。そしてそれを売って金を得た。

それを売ったことでタロツクとカーネフェルの戦争は激化。そして流れてくる移民、亡命者。そこにやってきた少子化。人の価値が数値化した時代。

セネトレアはここで次なる商品に目を付けた。それが人間。

雪国タロツクは食料不足に悩まされている。そこに金と食料を持つて商人は現れる。そして高価な女兒を売り渡させる。背に腹は代えられないということで、貧しい人々はそれに従う。

そして次はカーネフェルへ。セネトレアはタロツク人の国家。タロツク人の外見を利用し、奇襲を掛け、人を攫ってくる。

そしてそこにもう一つ新たな要因が加わる。狂王と名高いタロツク王が敷いた“ 男子虐殺令”。女が生まれず男ばかりが生まれる現状を打開すべく作られた、輪廻信仰からの悪法。跡継ぎである長男

以降生まれた男児をすべて処刑するというその法は、多くのタロツク人を震え上がらせた。

役人の目を誤魔化し女として育てたり、金を渡して見逃して貰ったり、そんなことをする親もいたが、子供が成長すれば金が無くなれば誤魔化しは利かなくなる。

そしてやつぱりそこに現れるのは奴隷商人。我が子を殺めるくらいなら、とタダ同然で売り渡す。どこか遠い場所で生きて幸せになつてくれると願つて。

勿論世の中そんなに甘くない。奴隷が送られるのはセネトレア。物言つ道具に生きる価値無し。使い潰されはい終わり。

そんな純血奴隷の現状を確認したところで、飛鳥はもう一つの奴隷貿易の存在を思い出す。

もう一つは混血奴隷の売買。TORAを治める頭は混血だと聞く。その頭が禁じているのはおそらく此方を差す言葉。

混血はさっきの獣同様、数値異常で生まれた新人類。黒髪のタロツク人と金髪のカーネフェル人の間に生まれた突然変異の子供達。デジツトの所にいるアルムとエルムの姉弟がそれだ。

髪や目の色にその数値異常が現れるため、純血とは異なる色を持つ。おまけに美形が多いことで有名だ。例えば平均的な容姿の両親から美少女だの美少年が生まれるわけだ。

それを普通に可愛がろうと言う余裕があつたのは道楽貴族達。普通の人間はそのあり得ない色と容姿に腰を抜かした。それで始まつたのが混血迫害。

その美しく可憐な者を殺すのは忍びないと引き取る貴族が現れ…  
…混血の価値は、上がった下がった。

貴族の間で混血ブームが起こり、それを愛玩動物のように愛で飼うのがこの世の中の上流階級の嗜みだ。

より美しい色、珍しい色。そして多くの混血。それを所有してい

ることがある種のステータス。人形のように飾り立て、社交界の供に連れ歩かれる姿は、まるで装飾品。美しい瞳の色も相まって、混血は宝石と例えられることがある。

人が人を飼う。この時点で既に人としての一線を逸脱してしまっているが、その程度で人の欲が終わるはずもない。

普通に犬猫のように可愛がられ愛される混血は稀だ。愛玩動物ではなく、彼らは奴隷貿易での目玉商品。一匹売れば何億という金が手にすることが出来るとあって、混血狩りは二重に加速した。

まずは金目的に生きたまま捕らえる者。

そして、その異様な色の化け物に高価な価値が付けられたことが許せない人間達の恨み辛み。彼らは純血至上主義を掲げ、過激な混血虐殺を行った。

つまり……TORAの頭は、混血の自分から情報を得たいのなら、その保護を受けたいのなら、混血迫害に荷担するな。そう言っているのだ。

だからまず、奴隷商なんかと繋がりのある者がこの組織に入ることは許されない。その審査を通った者だけが、そのシステムを利用することが出来る。

その登録の際、請負組織として登録しておく、それ専用のサポートを受けられる。TORAに寄せられた依頼の中から、その組織に向いた仕事を回してくれたり、とか。

そうでなくとも加盟していて損はない。TORAではなく自分の組織に直接やってきた依頼なんかの下準備に、情報収集の場として利用している者も多い。

しかし、危険人物と判断され登録出来ない人間は情報閲覧システムを使うことが出来ず、依頼の場合は直接窓口で交渉を行うことになる。幸い飛鳥は審査が通ったので、こうしてそのシステムを利用できているわけだ。

ぼんやりと長閑な村を眺めていると、村人がちゃんと三匹とも死んでいることを確認し、もう一度礼を言う。

「ありがとうございます！しかし一体どうやったんです？」

「ああ、まあ企業秘密と言いたいところだが、まあ毒駆除だ」「毒ですか！？」

自分たちが毒なら蒔いたが効かなかった驚く村人に、自分の毒はそんじよそこらの毒とは違つと飛鳥は口の端を歪ませ微笑する。

「ああ、これは俺の創作だからな」

「お兄ちゃん、剣士なのに剣使わないの？かつこわるー、毒なんてだつせー」

しかしそれをすぐさま聞きつけた子供に笑われた。

(おのれ芋ガキ。良い度胸じゃねえか)

大人げなくも相手になつてやろうと子供の方へと振り向いた。

この子供はまだ世の中と飛鳥と毒を舐めきつている。幼さ故の無知だろう。勝手に憧れ勝手に失望し始めた。

「請負組織つてもつと格好いいと思つたのにさ」

「おいおい毒を舐めるなよガキ」

「舐めないよ。美味しく無さそうだもん」

「そつちの舐めるじゃねえから。毒の渋さがわからねえとはお前人生の半分をそんしてるぜ」

小一時間ほど説教でもしてやろうかと思つたが、村人達が後ろでくすくす笑い出したのでどうでもよくなつた。子供相手に本気にな

るのも馬鹿らしい。

とりあえずここは下手に長文をぐだぐだ語るのはよろしくない。それを言い訳と見なされ余計失望されるのがオチだ。子供には理論的な話は向かない。それならむしろ、適度に恰好付けた方が簡単に納得してくれるか。

「いいかガキ。強い剣士つてのは滅多な事じゃ剣を抜かねんだよ」

ふつと何かを内に秘めた物憂げな憂い顔でそう意味深に語れば、子供は途端にはしゃぎ出す。森で普通に剣を使ったことはこの際置いておく。勿論内に秘めたことなどないし、深い意味など無い、見え透いた嘘だ。

世の中そんなに甘くないし綺麗事ばかりではないが、それを信じている子供に現実叩き付ける必要はない。そんな面倒まで見てられない。子守りを依頼されたわけではないし。

しかしその一言で何故か活気づいた村人達は見送りの際に剣士様コールを始めた。恥ずかしいが、好意が感じられるからそう悪い気はしない。金目的だったのに、これではまるでいいことをしてみたみたいだ。

空気を読んでどこかの立派な騎士のように、爽やかな笑顔で手を挙げ立ち去る。

多分顔見知りが見たら「ギャグ？」爆笑しているところだが、初対面の人間なんてこんなものだ。

「転職でもすっかな」

帰路に付きながら飛鳥はそう呟いた。

我ながらなかなか演技力がある。嘘を吐くのは得意だし、人を騙すのはもはや特技だ。

稀少な純血カーネフェル人の外見だ。父親譲りの瞳の緑はそこらの人間より深い色。森の日陰……その緑よりももっと濃いと思う。髪の色だって金髪とは言っても明る過ぎない。きちんとした恰好くらいすれば貴族の下に転がり込むことなど容易いだろう。この外見を利用してもしどこかの貴族のお抱えの劇団とかにでも就職できたなら。日給は幾らくらいなんだろうか。時給なんだろうか。歩合制なんだろうか。今より稼げるんだろうか。

そんな下らないことを考えている内に見慣れた景色が見えてきた。その頃には

西裏町の目印、時計塔。それを見ると、帰ってきたと思う。ここは故郷でも何でも無いけれど。

「アスカおかえり！」

宿の扉を開けるとアルムが出迎えてくれる。可愛らしい笑顔が此方に向くが、それ以上などない。買い出しに行ったエルムの帰宅時にするよう抱き付いたりとか、そんなサービスはない。親しき仲にも壁はあり。ただしあつて欲しい容赦はない。

しかしそれでいい。彼女がぱたぱたと駆け寄ってくるときはろくなことがないから、今回は何もなかったのだろうとそれに安堵する。ほっと息を吐いたときだった。アルムが思いきりずっこけた。床ふきをしていた彼女が放置していた雑巾バケツが招いた悲劇。

そしてアルムがぱたぱたと此方に寄ってきた。ろくでもないことが起きた証拠だ。

「アスカ……どうしよう」

「………とりあえず、雑巾持ってこようぜ？」

頭の片隅で笑えばいいと思うよ。とかそんな現実逃避めいた声が聞こえたが、逃避しているわけにもいかない。帰宅早々床ふきを手

伝わされることになるは思わなかったが、自身のリアルラックの底値に慣れて、こんな展開に今更嘆く弱さなど無い。

そうしてぞうきん掛けを始めた飛鳥は……視線を感じて顔を上げる。そこには嘲笑うように此方を見下す人の瞳があった。

「……………いい様だな」

そう吐き捨てほくそ笑むのは黒衣の男。髪も瞳も真っ黒なのに、その上服まで黒とかどういふ趣味しているんだろう。気まぐれで掛けたり掛けなかつたりする眼鏡は今日は掛けている。

言うまでもなく彼はタロツク人。飛鳥が敵国のカーネフェル人だからというわけではないが、気に入らない相手であることは確かだ。

「どうしてこういふ時ばかりてめえは……」

普段は地下室に籠もりきりで出てくることはないこの宿のお荷物居候。洛又ラッシャという名のこの男は闇医者をやっている。腕は立つようだが、闇医者なので何かしら法を犯している犯罪者。

この宿は最高だ。飯は旨いし、ディジットもいるし、常連客も気の良い奴ばかり。しかし気に入らない点がひとつだけあるとするなら、それこそこの闇医者だ。絶望的に馬が合わない。それどころか互いに互いが大嫌いだ。深い理由は特にないが、気に入らないものは気に入らない。

「貴様は床を這い蹲っている姿がよく似合うな。おそらく前世は蛆虫か何かだったのではないか？」

「ゴリア闇医者！お前の大好きなアルムのためだ。お前もぞうきんがけしろ」

思いきり雑巾を投げてやるが、避けられる。地下室の黴の分際で

生意気な。

「断る。貴様のような下賤な人間ならばいざ知らず、この俺の指は繊細なんだ。命を扱うための商売道具故」

この闇医者と比べたらまだモヤシの方がしつかりした筋力があるだろうに。お前は地下室で何やってんだ。隠れて肉体改造なんかしてたら思いきり笑ってやる。腕立てとか腹筋とかをこの根暗男が薄暗い地下室で励んでいる姿を想像し、軽く吹き出す。

それを欠陥品を見るような憐れみの視線で返される。

「しかし貴様、……ぞうきん掛けと言ったか？まさか彼女にそんなことをさせたのか!？」

信じられないと言う風に目を見開いて。すぐにアルムに向き直る。床が何だの言っていた男が床へと片膝を付き、幼い少女の手を取った。闇医者は彼女のその手に雑巾が捕まれていることを知り、すぐさま手を放させる。

「いかん。手が荒れている。これは由々しき事態だ。アルム、私が診てやるう」

「馬鹿なこと言ってないでいい加減今月の家賃払ってくださいよ洛又さん」

完全に変質者のノリで地下室に幼女を連れ込もうとした闇医者に、どこからともなく現れた弟エルムがストップをかける。

これこそエルムの特技。足音を殺すことが得意なのと影の薄さという天性の才で時折人を驚かせる。それを理解している飛鳥も内心驚いた。

しかし闇医者はその来訪も知っていたようくると姉から弟へと

向き直る。

「お早うエルム。君は今朝も美しい髪をしているな。庭師が真心込めて育てた薔薇とて君の色には敵うまい」

よくよく考えなくとも、普通に食事を届けに行ったりと地下室へ双子は遊びに行っている。しかし思わず止めずにはいられない危なさがこの闇医者にはあった。そして今度は弟の方を口説きにかかった。完全に変態です。ありがとうございました。

「洛叉さん、もう昼ですから」

これ以上寝言を言うのならいつそのこと永眠しやがればいいのに。そんな含みを込めてエルムが語るが、この腐れ闇医者はめげない。むしろ混血美少年に罵られて眼福。そんな空気すら漂わせていた。さっきまでドS顔で人を見下していた男は何処へ消えたのか。

デジタルも何故こんな男を匿っているのか。あまつさえこの男の何処に人として惚れる要素があるのか。全く理解できない。自分が仮に女でも、絶対に彼には惚れない自身がある。確かに顔は悪くないかも知れないが、それ以上でも以下でもない。

良く言えば知的クールなインテリジェンス。悪く言うなら根暗陰湿変質者。おまけに性悪と来ている。最悪だ。はっきり言って最悪だ。

飛鳥はこの危険人物をどうしてくれようと、闇医者自身にも聞かせるようにエルムを注意する。

「止めとけエルム、こいつは変態だ。変態は相手にするだけ無駄だ。何やっても基本的に喜ぶ」

「ですけどアスカさん。無視してもそれはそれで喜ばれるんで困るんですよ」

「ああ、そう来たか」

対処の仕様がなない。もういつそのこと城にでも聖十字にでも突き出せばいいんじゃないかこの犯罪者。何をやらかしたか知らないが、この闇医者は国際指名手配をされている重罪人だ。おそらく幼女監禁強姦致死罪とかそんなものだろう。絶対そうだ。そういう顔をしている。いや、もしかしたら相手は少年かもしれないが。なるほど、見事な変態だ。感心する。感心ついでもう二度と視界に入らないでくれればいいのに。

「あ、そう言えばアスカさんは仕事帰りでしたよね。お疲れの所引き留めて……いや、姉が迷惑掛けてすみません」

「いや、まあ気にすんな」

気配りの出来る弟は、飛鳥が闇医者の罪状を妄想している短時間でこの場のそもそもの状況を完全に把握したらしい。

彼の言葉に思わずいつものことだし、と付け加えそうになった自分を自制。しかしこの少年は聡い。おそらく飲み込んだ言葉を知っている。申し訳なさそうに頭を下げて飛鳥の手から雑巾を奪った。

「姉さん、洛叉さんと遊ぶのはこれが終わってから。わかった？」

「はい、エルムちゃん！」

「……労働に勤しむ混血というのも絵として悪くない。素材が良いから何をしていても映える、いやだがしかし」

「お前本当に一回絞首刑でもなつてこいよ頼むから。もしくはさっさと地下帰れ」

ブツブツと怪しげな言葉を紡いでいる闇医者に皮肉を吐いてから、飛鳥は食堂兼一階を後にする。エルムがお目付役にいけば大丈夫だ

ろう。

アルムはぼーっとしているからどうにか出来ても、しっかりしているエルムは出来事を適確に言い表すことが出来る。

エルムは普通にディジットを慕っているから、彼女が悲しむような情報は伝えないだろうが、闇医者が何か問題を起こしたならすぐに彼女の通報するだろう。ディジットはあの双子を妹弟……いや、我が子のように可愛がっているから、そんなことが起きればすぐに百年の恋も冷めるはず。

(ま……大丈夫だろう)

気に入らない野郎だということは確かだが、奴もそこまで馬鹿じゃない。

奴がここに居座っているのはこの環境がいいからだ。

地下は倉庫以外闇医者が独占してるし、家賃だつてきちんと払っているか正直怪しい。ここから追い出されたらいろいろ困るに違いない。だから追い出されるようなことはしないでだろう。

それに彼からは何か、感じるのだ。自分と同じ感じ……とまではいかないが、似たような属性の人間だと思う。非常に不本意だが。

表情と言葉じゃない。目と声が合っていない。彼の言葉は本当でもあり嘘でもある。そんな風な不確かさ。それが自分とよく似ているのだ。

アルム達に興味があるのは本当だろう。だが、それがどういう興味なのかはいまいち判別尽きかねる。

どちらにしるなんか危ないのは確かだ。目がイッチまってる。だからここは丸く収めて幼児性愛ということにして罵っておくのが慣例。混血マニアという属性もそれに加えておこう。

混血好きは大抵変態だ。混血が生まれて今年で18年。飛鳥が生まれ1年前にこのセネトレアで生まれたのが混血の起源だったという話。発祥の地だから世界で一番混血狩りが激しいのもこの国では

ある。

今は表だった狩りはそんなになくなったが、完全になくなったわけでもない。混血虐待の影に隠れてそれが見えにくくなっているだけだ。

混血を買うような人間は変態だ。最年長でもまだ18。十代とかそれにまだ満たないそんな子供に興味を示す奴は変態だ。

だからやっぱりあの男は変態だろう。そういう結論に飛鳥は達したが、今更だと思いついた。

よく考えなくともあの男は変態だ。以上、考察終了。

(無駄な考察で時間つかちまった……)

朝早くから仕事。それに往復歩き。それなりに疲れた。

(二度寝でもするか)

布団の感触を思い出しながら、借りている自室のある三階まで、二段抜かして階段を登る。廊下を進み部屋の扉まで辿り着く。鍵を開けて開けばそこは勝手知ったる我が家。

「あー……怠い怠いと」

頭を掻きながらずかずかと歩みを進め、腕を振りろす動作。

上着として愛用している着物の裾、そこに隠した短剣を投げ飛ばす。

誰もいないはずの空中。その刃物が見えない壁に阻まれたよう、弾き返され床へと落ちる。

「へえ……僕に気付くとは、なかなかやるね」

聞こえたのは女の声。面白がるような響きを感じた。

しかし勝手に人の部屋に上がり込まれた自分としては、まったく面白くはない。

「そいつはどうも。で？城と教会どっちに突き出されたいんだ不法侵入者？」

ギロとその壁を睨み付けければ、その辺りの空気が光り出し、そこから一人の女が現れた。

女というよりそれは少女だ。少女と言ってもデジタルよりは年下。アルムよりは年上。幼女以上少女未満というかそんな感じ。年にして13、14その辺りに見える外見だ。

「あはは どっちもお断り。大体そんなことしたら君も困るよね？」

長い金髪は、僅かに癖があり、右に左に刎ねている。しかし彼女はカーネフェル人ではない。瞳が青でも緑でもなく、金色だった。

飛鳥はその色に気付き、今の芸当の裏を取る。これは純血じゃない。混血だ。

「別に困んねえけど？俺は」

金を払って借りている自分の部屋だというのに、安らげない。これはまた……危険な相手が入り込んだものだ。

少女の瞳は金色……というより、まるで宝石だ。黒目と呼ぶべき目の端は良く見るれば茶色。瞳孔のあるべき瞳中枢が一番明るい。そこが金色に輝いて見えるその様は、虎目石そっくりだ。

(こいつ……数術使いだ)

そんな危険な相手だというのに、その外見はなんとも拍子抜けす

る。

フード付きの赤いケープとスカートと……リボンとフリルを随所にあしらった可愛い服装だった。良く見ればフードには猫のような耳の形になっている。

外見だけなら可愛い女の子。地下室の闇医者を呼んでくれば喜びそうなの……

そのまま地下室の男に煮るなり焼くなり好きに始末しろと預けに行こうかとも思ったが、正直それは難しい。難しいといつかまず無理だ。

混血が狩られる対象になったのは、何も外見だけのせいではない。混血には数術の才が先天的に高い。

この世の全ては数字。その数を視覚で捉え、働きかける力を持つ奇跡の使い手。

何も見えない才無き人間から見れば、まるで魔法。けれどそこにはちゃんとした法則があつて、彼らがやっているのは数学だ。計算によってその魔法めいた現象を引き起こしている。

けれど飛鳥には数術の才など……ほとんど無い。

数術使い達のように世界を数値としては見えない。見えないがわけあつてというか運が良かったというか、そんなわけでちょっと使える。その程度だ。

その自分が見えるのは止血とか。その程度の回復数式。

しかしこの少女は違う。密室へと入り込み、姿を消して……そんな計算式、飛鳥は知らない。知ったところで使えない。それが解る。純血が見える数術なんて、たかが知れてる。無理をすれば脳味噌が沸騰して脳死か廃人か。

それが純血と混血の違い。

純血に出来ないことをいとも簡単にやってのける。その異質さへ

の恐れ。それが迫害の根本にある。

自分は純血至上主義でもないはず。それでも飛鳥は今知った。殺さなければ、殺される。こんな恐ろしい存在と、同じ空間に生きることなど出来ない。

飛鳥の反応を見た少女は、面白がるようにこりと笑った。

その笑い方は飛鳥や闇医者と同じ。笑ってるけど、笑っていない。その気になれば今すぐに、お前なんか殺せるんだ。でもそうしない。でもそうしようか？どうしようかな。そんな風に笑う彼女。その掌で弄ばれているような薄気味悪さ。

「まあ、そんなことはさて置きさ。ねえ、飛鳥君。僕は君に頼みたいことがあるんだよ」

教えてもない名前を知る少女。その名を呼ぶことで、彼女は自分を支配するよう、言葉を紡ぐ。

今この瞬間、飛鳥はこの少女に支配されていた。断れない。断れない。断れない。

笑顔のほずのその少女。しかしその内の唯ならぬ迫力に飲まれ、飛鳥は息を呑む。

その時だった。脳内に呟した声。女の声。

(……そうだ)

自分に命令していいのも。支配していいのも。それはこの世界に一人だけ。

それ以外の言葉に屈することは許されない。

我を取り戻した飛鳥の口は……いつも通りに不敵に笑い、はつたりの虚勢の言葉を紡ぐ。

「お願いします、だろ？年上動かすには礼儀つてのが必要だぜ、世間知らずの嬢ちゃん」

少女は丸く瞳を見開いた後、口をつり上げ三日月型に笑わせる。

「……へえ、やるつもり？僕が数術使いだって気付いてないわけでもないだろうに」

「てめえ俺をストーキングしてたろ？視線が煩わしいっいたらなかつたぜ」

「うわ。バレてた？帰宅途中の君のあの独り言のあの下りは吹き出しそうになってやばかったよ。“俺だって別に顔は悪くねえんだしすぐに花形役者になってそう遠くに行つてようやく俺の大事さに気付いたデジットが”の辺りとか」

「すいませんでしたお嬢様。俺が悪かつたんでその辺で勘弁してください」

視線なんか気付いてなかったが言ってみただけ。

正解どころか聞かれたくないことまで聞かれていたようだ。失策所の話じゃない。

すぐさま謝罪を告げればお気に召したのか、少女がけたけた笑う。

「あははははは。凄いや飛鳥君、全然心込もってない」

「込める気ねえしな、当然だろ」

「あははははは」

心底おかしいと言つた風に笑つていた少女はそこでぴたとそれを止め、真顔に戻る。

「安心してよ。今君をどうこうするつもりならとっくにそうしてる。僕がどうしてここでわざわざ君を待っていたと思つ？」



少女が語る。その名は脳より先に耳が動いた。それくらい良く聞く、聞き慣れた単語だったのだ。

「情報請負組織TORAの頭。今後是非ともご鼻屑に……アスカ君？」

1章ヒロイン？トーラの依頼。夢の内容が違うのは、最初の冒頭で使ってしまったからです。

もう一人のヒロイン？は次話から。

あんまり面倒な依頼でなければ、或いは報酬がこれでもかかってく  
らい出るのなら、受けてやっても良いと思った。しかし……だ。そ  
れは相手にもよる。

アスカは自覚する。たぶん今現在自分の口はぼかんとだらしなく  
弧を描いているであろうと。ついでに両目も。

しかしそれは何も自分だけでもない。

もしこんな状況に放り込まれたら、誰だってそうなる。そうに違  
いない。

(トーラ……だと?……マジで?嘘だろ?こんなガキが、あの大組  
織のお頭だつて?)

情報請負組織TORA。アスカも契約上その傘下に入り、加盟し  
ている大組織。先の依頼でもいろいろ世話になっているその組織。

確かに、風の噂では……情報請負組織の長は混血だという話。そ  
れが男か女かは不明だが、凄腕の数術使いだという話はあまりに有  
名。しかし、それが彼女だという保証は何処にもないわけで。第一  
疑問を上げるなら、その外見。TORAの設立と目の前の少女の年  
齢が合わない。十年前に作られた組織の長、代替わりしたという話  
はない。この少女が三歳、四歳の頃に組織を立ち上げたとは思えな  
い。

故に……結論、寝言は寝て言え。アスカはあっさり結論を下し、  
混血の少女に笑みかける。満面の笑み。いつそ胡散臭いがまでの爽  
やかさ。アスカをある程度知る者なら、間違いない疑いの目を向け  
るであろう表情。

しかし、この少女とは初対面。探りを入れる必要がある。どの程  
度自分を知られているのか。これが本物でも偽物でも、得体の知ら

ない奴からの依頼を受けるわけにはいかない。金は確かに必要だ。大物からの依頼は喜ばしいこと。それでも死んでしまつては意味がない。依頼人として信頼に足りるか。今度はアスカが彼女を試す版だつた。

「そうか。そいつは凄い。ところで何だ、ここ3階だろ？今日は日差しも強いし部屋暑いし涼しい地下室にでも移動しないかお嬢さん？依頼人を俺のむさ苦しい部屋に通すのもどうかと思うしな」

「ははは、ご謙遜を。年頃の男の子の部屋にしては片付いてる方だと思つよ？寝台の下に異常がないくらい片付いてる」

「そんな典型的な所に置けるか。アルムやエルムがに勝手に出入りされてるんだ……あの年頃のガキにの目に触れさせるわけにもいかねえだろ」

「そうだよねー偉いねー、僥倖家のアスカ君は家まで持つて帰らないで立ち読みで脳内に刻み込むタイプだもんね」

「プライバシーねえのかあんたは！！」

「あははははは、だつてなかなか信じてくれないんだもん、僕があ  
のトーラだつて」

「ち……、唯の不法侵入者ならあの変態野郎に押しつけてやると思つたのに。お見通しつてわけか？」

「白々しすぎるよ。それに僕は情報請負組織の頭。西裏町は僕のホームグラウンド。何処にどんな人が暮らしてるかどんなことしてるかくらい大体把握してる。そうは思わない“飛鳥”君？」

名前の呼び方。そのイントネーションに僅かな含み。

(今のは……タロツク語!?)

アスカが少女……自称TORAの長へと目をやったのは反射。今じゃあの闇医者くらいしかそう呼ぶ者はいない、耳に懐かしい異国

の言葉。

アスカが目を見開くのを見、少女はにたりと笑む。予想通りの反応をありがとう、そんな風に語る表情。

「驚いた、カーネフェルの金髪の癖に……話せるんだなタロツク語」  
「混血の髪色は確立の問題だよアスカ君。僕は混血だから、色で判断するのはよくないことさ」

「……その年で二カ国語話せるのか？」  
「嫌だなあ。アスカ君だってもっとちっちな頃から話せてたじゃない」

答えが答えになっていない。代わりに聞いてもいないことを少女は語る。この国へ来て、誰にも話していない自身の経歴を暴露するかのような、その情報。

それはつまり、彼女はこう言っているのだ。“私はお前を知っている。お前が誰か、知っている”……その僅かの情報に隠された含みに、アスカはぞっとする。

(情報請負組織の……頭、か)

どうやらそれを信じなければならぬらしい。

アスカの溜息一つから、降伏を読み取った少女。彼女は面白がるよう、けたけた笑う。少女のその様子に、似てるなとアスカは思う。目の前の少女は自分に似ている。笑っているが、本気では笑っていない。胡散臭さというか何というか。思ったことを口にしていないし、表情まで偽りだ。自分が言うのもあれだが、要するに信用するのは危険な人間。探りを入れるはずが逆に探られている。

口先にはそこそこ自信があった自分が完全に遊ばれている。

彼女の自信は、その情報。知っていると言うことはそれだけで大きな力。彼女をよく知らないアスカでは彼女には勝てない。それを

今は認めるしかなかった。

「セネトレア生まれじゃないのか？完全に、タロツクの発音だった  
が」

「ううん、僕はアスカ君とは違って、生まれも育ちも生粋のセネト  
レアっ子だよ。商売に携わる身としては、これくらい出来なきゃね  
え」

少女はさも当然という口ぶりだが、これはそんな簡単な話でもな  
い。

セネトレアはタロツク圏。貿易の中心地でもあり、この国の人間  
は大体タロツク語とカーネフェル語の二カ国語はマスターしてる。  
シャトランジアの古代語は現代で仕える奴らは教会の上層部とかそ  
の辺の奴だけ。

タロツクは鎖国をしているから、共通語として使われるのはカー  
ネフェル語の方が主流。

しかし先にも述べたが、貿易の中心地であるセネトレア王国はタ  
ロツク圏。

だからセネトレア生まれの者はタロツク語を日常的に使う。彼ら  
の話す言葉の意味を知らなければカーネフェル人は騙され損をする。  
そんな理由でカーネフェル人もタロツク語をマスターせずにはセネト  
レアに来るのは無謀。そんな状態で観光にでも来たら、間違いなく  
国には帰れない。その無謀さは、身包み剥いで殺すか売り飛ばして  
くださいと書かれた張り紙を背に付けて歩いているようなものだけ  
ら。

この一癖も蓋癖もある物騒なセネトレアという国とやり合うため  
には、力か金が……更に付け加えるなら頭、狡賢さが必要となる。

金だけあってもそいつが馬鹿なら雇った護衛に金を奪われ殺され  
ることだってあり得るのだ。少なくとも、言葉が通じなければ話にな  
らない。雇う以前の問題だ。

故にセネトレアでは二カ国語が混ざった、セネトレア訛りの言葉が使われている。

だから本国出身の人間がセネトレア語を聞けば、発音に違和感を感じることもある。

タロツク育ちの自分が違和感を感じないその完璧な発音。

「本当に疑り深いね君。まだ僕をトーラと認めたくないって感じがブンブンするよ」

落とした視線の向こうから、此方を覗き込んでくる少女の金の双眸。キラキラと光るそれは、こちらを値踏みするようだ。

「見た目で人を判断するのは愚か者の証拠だよ？君はそんなに馬鹿な男だったなんて、僕の見込み違いだったかな」

頭では認めつつ、尚も納得したまらないアスカに少女は溜息一つ。

「あのね、アスカ君。いいこと教えておいてあげるよ。数術使いとか混血を、見た目通りで判断するのは危ないよ？年齢だけで言うなら僕はアスカ君より数ヶ月年上のお姉さんだし」

「……え、マジで？」

「うん。マジで。僕の姿の情報が外に漏れないのは、僕がその時々で姿を変えているから。そんな風には思わなかった？」

少女からもたらされた情報は、アスカがまったく知らないものだった。

これまで自分が見た数術使い（自称）は、髭面で腰の曲がった爺やら、鼻の長い老婆だの……いかにもそれっぽい雰囲気の間人か、明らかに嘘といった感じの大嘘つきの若者だった。ちなみにどちら

も詐欺師みたいなものだった。

「……視覚数術って奴か。話には聞いたことはあるが、実際やってのけた奴は初めて見たぜ」

「数術にもいろんな系統があるからねえ……。脳内計算の普通数術に、契約数術、それからアスカ君の使ってる代理数術。この世界の万物が数字である以上、理論上数術使いは何でもありではあるね」

アスカの知る数術であり、少しは使えるそれは、代理数術。これも一種の運だ。

その家だとか本人とかが精霊なんかの祝福を受けていると、その加護を受けられる。この場合計算の代理をしてくれるのはその精霊とか。見えないアスカが脳内計算無しで数術を扱えるのはこのためだ。父親がえらく精霊に好かれやすい奴だったもんで、その恩恵を息子の自分まで頂いている形、らしい。

本人は笑い話のように沼に引きずり込まれそうになったただとか森で神隠しにあっただとか話してくれたが、その度にアスカの母が精霊に一騎打ちで挑み取り返しに行っていたらしい。

もしかしたら彼女が、負けた代償に末代まで祝福しろという約束でも取り付けたのかもしれないが……。死人に口なし。今となってはその真相は行方不明。

しかしそんな精霊数術は基本的に四大元素。火、水、風、土に係するものばかり。ちよつと火を出したり風を吹かせたりその程度。姿を変えるだとか、消すだとか、場所を移動するなんてそのどれにも当てはまらない。

精霊にお願いして力を貸して貰ってる自分とは違い、数術使いであるトーラはその現象全てを脳内で計算し、空中に記述し、それを展開させる。だから割と自由なことが出来るのだろっ。

風の精霊に火を出してくれたの水を出してくれたのとは頼むのは無理は染んだんで、こう言うては何だが融通が利かない。アスカは

自身の数術をそんな風に思っている。

「まあ、消費は少ないから僕レベルとなれば簡単に使うけど……初心者にはちょっと難しい術だからねえ」

消費とは数術を使う上での足し算引き算割り算掛け算、それにより引かれず数、代償のこと。代理数術の使い手の自分には殆どその代償はない。

精霊達は元素に近い存在だから、その数を取り込むのは容易。自分自身の数を捧げる零の数術と、周りの空気中の元素の数を用いて術を紡ぐ壱の数術使いと、二種類の術師がいるというが、精霊なんかはみんなこの壱の数術使いなのだろう。

目の前の少女は自分で術の全てを展開させる本物の数術使いだから、自分からか周りからかは知らないが、何らかの代償を支払っているのだろう。

ならばこの場合の消費とは、脳内計算による……身体への負担のことだろう。精霊は人とは違う造りの存在だから、数術を酷使しても人のように脳死になることはないという。しかし人間は違う。無理な数術を使えば、その計算量に脳内計算が間に合わず、脳がやられる。

だから、こんな巫山戯た格好をしていても……よくよく考えればこの少女は……凄いのだ。アスカの視線にその畏怖が含まれたのを知ってか少女はえっへんと胸を張る。そこはかとなく。

しかし今の姿ではあまり胸はない。自分は地下室の変態野郎とは違うので、完全に対象外だった。

「しかし年齢査証はいただけないな。地下の変態が泣いて叫くぞ？純モノでなければ意味がないのだとか言いながら」

「あはは、確かに言いそうだねえあの人なら」

「しかし……だからか。黙ってれば可愛らしいお嬢さんだって言う

のにまったくときめかねえと思つたら」

「アスカ君のストライクは、あれだもんね。年上は人妻属性、年下は一、二歳下が好みだもんね。年下なのにお姉さん属性とかっていうギャップ萌えに弱い、みたいな」

「ほんとお前の組織プライバシーねえのか？」

「嫌だなあ、アスカ君は特別だからさ」

「そんな特別のし付けて送り返したいぜ、運び専門請負組織に着払いで頼んで。つか何時調べやがったんだ？」

「うーんとね、君を追跡してたときの視線率による推測データ。基本的に君、面倒見はいいけど子供に興味ない感じだし。そんなわけでもないとこの姿でお邪魔した感じ。挨拶代わりの軽い嫌がらせ的なあれで」

話を合わせてケタケタ笑う少女は、子供の格好の方が油断する馬鹿が多いんだよと話、アスカ君は違かつたみたいだけどさと苦笑する。

否定はしない。確かナイフ投げたような記憶はある。

しかし当然だろう。女子供であろうと犯罪者は犯罪者。不法侵入者は不法侵入者。容赦してたらキリがないのがセネトレア。隙を見せればジエンドが、この国のお約束。

「で？結局あんた俺に依頼引き受けさせたくないのか？」

「え？そんなこと無いよー……かつこわらい」

がつくりと肩を落とすと、トーラは憐れみの眼差しで肩を叩いてくる。何か悟つたような表情で首を左右に振っている。「君もいい年なのに無茶して騒ぐから……」そんな風に言っているようだ。この脱力感と頭痛と疲労は主にお前のせいだと言ってやりたい。……

が、それを言ったら更なる拾うに繋がると予見できたので、言葉を胸に押し留める。世界はあまりに理不尽だ。こんなのが自分より年上だとか。年上なのにこんななはっちゃけた奴がいていいのか、とか。自分のことは棚に上げてアスカは考える。

「……あのなあ」

半ば呆れ気味に零した言葉に、少女が頷く。

「君はあんまり本物の数術使いとやりあつた経験がないんだね、つまりは」

大げさに頷く少女からは、自分は本物の数術使いですが何か？そんな含みがありありと感じられる。確かに、それを否定する要因は……悔しいことに見つからない。

このセネトレアには三流数術使い……要するに自称野郎はあまりに多い。詐欺師同然の奴らばかり。

この少女は、本物だ。姿を消したり姿を変えたり、勝手に部屋に入り込む。まるで魔法。……そんな奇跡を引き起こす才能。三下が見様見真似で真似ようと、こつはならない。彼女と自分を比べるのなら、彼女は本物、自分は三下……よりはちよつとはマシだから二下くらいの存在だ。

「確かに君がうちで引き受けた依頼の内容に、あんまりそういうのはないからねー……数年前に一回報酬目当てで引き受けて痛い目会ったんだっけ？楽しんで金儲けしようとか数術使いと組んででかい山に挑もうとしたら、その子が前金貰ってとんずらしたっていう」  
「そこまでデータあるなら人の古傷穿り返すなよ……ったく」

セネトレアに来たばかりの頃の話だ。それなりの金を出して雇っ

た数術使いが唯の人間。仕事には来ない。契約不履行で文句を言いにもとい半殺しに行こうとしたら逃げられた後。

当然依頼は失敗。依頼人と護衛仲間から私刑に合うわ、表で働く道も閉ざされ……そんなわけで裏町の住人になったわけだが、どうにもこっちの方が性に合っていた。

「……まあ、あの件ではTORAに感謝してる。情報の大事さが痛いほどわかったからな」

「あれ？ やつと認めてくれた？」

まだ信じてくれないならその時の詐欺師の名前でも出してあげようかと思つたとトーラが笑う。正直遠慮したい。やめてくれ。思い出したくもない。

顔をしかめたアスカにトーラは話題を変える。空気が読めないわけではないらしい。

「……で、セネトレアー有名な請負組織のお頭が、中小組織の俺の所に何のご用だ？ まさかわざわざ報酬手渡しに来たわけじゃないだろうな？」

経歴全てを洗われた。それでアスカの正体を見事に曝いた彼女には感服するしかない。

それでも悔しいので、皮肉位は言わせて貰う。

「そんなことなら不法侵入も姿消すのもする意味ないんだけどね」

「あんたはさつき俺を試した、みたいなことを言っていたな。組織ランクの抜き打ちテストとかそんなもんだつたりする？ それなら加盟組織として文句は言えないが」

「あー……それは無理かな。君の組織って基本的に君一人でしょ？ 規模の大きさもランクには反映されるから難しいな」

「ほほう、そんな情報があったのか。通りで最近ランク伸び悩んでると思っただんだ」

「そうそう。それでもアスカ君の仕事ぶりは僕の目に留まった。だから僕はここに来た」

そのまま聞けば、大々組織の盟主様が直々に弱小組織の自分の所にねぎらいに来てくださった。そんな風に解釈できるかも知れない。しかし少女のキラキラ光る金色の瞳は、そんな穏やかな色には見えない。何か企んでやがるなど、アスカの勘がそう告げる。

「ねえアスカ君。僕からの依頼、受ける気ない？報酬は弾むよ。君の欲しがってた情報まで手の届く金を……ってのは面倒だから、君の欲しい情報をあげる。破格でしょ？」

「……何をさせる気だよ」

アスカの求める情報は、とてもじゃないが安い額ではない。この9年間必死に貯めて貯めて貯めまくっても、未だに届かない額なのだ。その額は、もしかしたら国家予算1年分くらいにはなるんじゃないだろうか？

それを依頼一つと引き替えに与えるとは……狂気の沙汰。何かあると疑う余地しかない。

喉から手が出るほど欲しい餌。それを目の前に突きつけられても、アスカは冷静。初対面の人間の言葉を鵜呑みにするような愚かさはどうに無くした。そんな純粹な心も遠い昔に。

アスカの疑いの眼差しを満足そうに見つめるトーラが、自らの組織を語り出す。信頼を得るには自らを語る必要があると判断したのだらう。

「情報請負組織TORAでは一般人じゃ手の届かない高額な情報をいくつも持っている。国家間に対立を引き起こせる種だって幾ら

でもある。でもね、それは売らないんだよ。僕の組織を、混血達を守るための盾。それが僕の裏情報。これがあるからどの国も僕らに手出しが出来ない」

「おいおい……地道に何億も貯め込んだ俺の苦勞をどうしてくれるんだ」

あまりの話の大きさに、アスカは皮肉以外の言葉を無くす。

「君の欲しがってた情報も億越え情報。売らない裏情報だったのも知らない君が可哀想になってきたよ。うん」

「確かにことによっちゃ、中立のシャトランジアまで戦争に顔を出すことになりかねないよな」

自分の求める情報は、確かに危険だ。その情報を持ち込む場所によつては大問題。

確かにその情報をトーラが掴んでいて誰にも売っていないのなら、それを是非とも教えて貰いたい。上の連中にとっては箱の中の猫の生死が問題なのだろうが、アスカにとっては少し違う。

アスカが求めているのは、猫の行方。  
意味は違うが過程と結果は変わらない。トーラが洩るのも当然だった。

「そう。君の求める真実は世界の均衡を崩しかねない危険な情報だから君のことを少し調べさせてもらったんだ」

「……少し？洗いざらいの間違いじゃないか？」

「あはは、鋭いなあ飛鳥君は。でも安心してよ、別に捨て駒扱いのハイリスクの仕事頼みたい訳じゃあないんだよ、僕は」

にこりと笑うトーラ。ようやく観念したかと、はじめて割と本気で彼女が笑った。

「僕が君に頼みたいのは、ある通り魔について」

「物騒な話だな」

「あはは、そうだね」

悪びれもなくあっさり肯定するトーラ。

「だけど僕はその通り魔を捕まえて欲しいとは言わない。君に見てきて欲しいんだ、その犯人の顔を」

「僕は正義の味方じゃないからね。僕が情報を集めるのはあくまで僕と混血と組織の保身のため。危ない橋は渡りたくはないけれど、僕は知らないことがあってはならない。この国……この街について誰よりも早く正しく真実を所持する必要がある」

話に茶々を入れていては肝心な話を聞けない。

聞きたいことはいろいろあるが、この相手が正直に話してくれるようには思えない。なら、此方が此方で読み取るしかない。アスカはトーラの言葉に耳を傾ける。

「その通り魔が出没するのはこの王都ベストバウアーの東裏町。

西は僕のテリトリーだけど、東はそうじゃない。東は……奴隷商人達の領域だ。こっちに流れてくる情報も限られてくる。それに目撃者がだあれもないんだ。被害者はみんな毒殺されてるからねえ」

「毒殺………だつて!？」

思わずアスカは声を荒げる。その単語は、あまりに自分と関わりの深いものだった。だからおそらくは条件反射的なもの。その反応を予想していたようなトーラはさほど驚きもせず、にやりと笑う。

「あ、食い付いてきた。……まあ、まだまだこんなもんじゃないよ？僕はいろいろ頑張つて犯行に使われた毒を得ることに成功した。そして僕の情報解析能力でそれを調べまくった。そしたら君以外の誰にも頼めないことが解った」

トーラは一息置いて、僅かに低い声色で……その忌み名を口にした。

「犯行に使われた毒は、屍毒“ゼクヴェンツ”」

「ぜ、ゼクヴェンツ……だって！？そんな、馬鹿なっ！！あの毒が外に出ることなんて……」

「至高の毒……やっぱり君は知ってたね？……忘れられるわけもないよね。アスカ君、君の大事なご主人様を殺した毒だ」

その単語を、まさか異国で聞くことになるうとは。アスカは今度こそ、絶句。そしてようやく悟る。全てのどうして。

トーラが自分を試したのも、依頼を持ってきたのも、全てはそこに関わることだった。

確かに、それなら自分以外に……引き受けられては困る。それがあれに繋がることならば。

「一人の男の狂気が生み出した、恐ろしい毒。毒の王国タロツクでもお伽話の猛毒の名前。タロツクに居たことがある君なら勿論知ってる名前でしょ？」

「大昔の狂王の話、だろ……？」

「うん。タロツクの建国者にして、シャトランジアにまで挑んだ昏君のお伽話」

伝説上の毒。現実ではないということになっている毒。

それでもアスカは知っている。その毒が歴史の上では割と最近で

も用いられたこと。

そしてそれが、確かに存在しているのだということも。

「僕はその空想上の毒が、存在していることを知っている。そして君も知っている。そうだよな？」

自称世界一の情報屋も、その存在を知っていると口にした。

どこからその情報を手に入れてきたかは知らないが、彼女の情報は認めざるを得ない。こいつは確かに、腕のいい数術使いだ。

「普通の人はお伽噺の中の創作毒だと思ってる。かつてあったとしても、今はもう存在しない伝説の毒だって。でも僕はそして君も知っている。あの毒はまだこの世界に存在するんだってこと」

「だが……あれが外に持ち出されるなんて。それこそ冗談じゃない！あれがどんなに危険なものか……知らずに使っているってのか？」

「さあね。ぶっちゃけ殺人事件なんて僕はどうでもいい。でもそっちの方は放っておけない。知らないってことはそれだけで不利。やば目の情報は誰より先に真実を手に入れておきたい」

「それでゼクヴェンツの情報を集める時に……俺が見つかったって言うことか」

アスカが小さく呟くと、トーラが頷く。

「そういうことさ。君は何度もあの毒について情報検索していたからね。どう？引き受けてくれる気になった？」

引き受けてくれる？だって？何を馬鹿なことを。トーラは完全にアスカの退路を断っていた。

「……どうせ引き受けないって言ったらそれこそ一生あの情報を俺に教えてはくれないんだろ？」

「うん」

「依頼っつかこれ脅迫じゃねえか！……まあ引き受けないわけにはいかなねえし、やるけど」

ここまで来たら、もう腹を括るしかない。虎穴に入らずんば虎兇を得ずとも言う。これ以上うだうだ言うのは時間と寿命と酸素の無駄だ。

依頼を引き受けるとトーラへ告げると、助かったよとにこにこ笑いながら、彼女は一枚の紙を差し出してくる。彼女が集めた情報で推測した次の犯行現場らしい。

おおよその時間帯までそこには記載されている。

ここまで解っているのなら……そうも思ったが、大所帯では犯人に気付かれる。一人を送り込むにはそれなりに逃げ足が速くてそこ強く、……そして絶対に裏切らない駒が必要。悲しいことにアス力はそれを満たしている。

人の足下みやがって……そう思う気持ちもあるが、これはチャンスだとも思う。すぐそこに、真実がある。この依頼を果たせば……ようやく願いに手が届く。

もう悪夢に悩まされることもない。終わるんだ。何もかも。

「別に犯人殺せとか捕まえろとかそういうのじゃないから死なない程度に頑張って？」

情報屋はそう言い残し、空間移動の数術で部屋から消えた。

後には何も残らない。一瞬視界が光ったような気がした。それに耐えると、もう何もない。騒がしい少女は何処にも居ない。

遠くから聞こえる街の喧噪。それがこの部屋でのありふれた静寂。

口から息が漏れるのは、長らく続いた緊張からようやく解放されたという安堵と……それから得も知れぬ高揚感からの。

トーラに教わった情報から、依頼は今夜。夜中に行けばいい。朝から仕事で疲れている。少し、仮眠しよう。依頼には万全の体調で望みたい。

ベッドメイクの済んだ皺のない布団……寝台に倒れ込むと、急に疲れが襲ってくる。瞼を閉じれば、それだけで……意識のそこへと沈んでいった。

\*

「昔々のお話です」

棺の傍の椅子へと腰掛けて、物語る少年の姿。

彼は赤子にそれを聞かせるように、童話を口にする。

それは、童話らしい無意味な残酷。子供に聞かせるのはどうだろうと思われるような文章の羅列。それでも彼も自分も、それは問題と思っっている。

相手は子供ではない。相手は、物言わぬ死体の眠る棺なのだ。

借りにそれが生きた子供であっても、なんら問題はない。これは誰でもよく知る、この国に伝わる話なのだ。

それは大体こんな話。

戦いの続く世界。ある小さな国に、一人の王子が生まれた。

王子は隣国の姫と結ばれる定めにあった。戦わず、国を強くするにはそれしかなかった。けれど王子は好きでもない女との結婚が死ぬほど嫌だった。

姫はとても美しい少女だったけれど、お淑やかなのは外見だけ。

王子は彼女の男勝りな性格をどうにも好きになれなかった。口うるさい彼女と寄り添わなければならぬのは耐え難い苦痛。

彼は逃げだそうとするが、それはことごとく失敗。それならばと、彼は毒を呷り自殺を図る。冥府へと逃げようとしたのだ。

けれど、それも失敗。

しかし毒に冒された王子は……頭の螺子が何本かいかれてしまう。誰かを殺すくらいなら、自分を殺して逃げようとした王子が、逆の発想を手に入れたのだ。

自分が逃げられないのなら、邪魔する全てを殺してしまえばいいのだと。

そして王子は婚姻の儀……宴の席に毒を盛る。婚約者も家族も親戚も……参加者全てを毒殺し、それを隣国の謀とし隣国を攻め滅ぼす。

バタバタと人が倒れていく。毒の魔力に取り憑かれた王子は世界中から毒を集めたいという衝動に駆られた。もっと珍しい毒を！素晴らしい毒を！美しい毒を！そうして戦い続ける内に、彼はその大陸を統一する覇者となる。

そして毒の狂王として世界に恐れられ、書物に名を記すことも許されず……今では名は失われた男。それでも彼の罪は世界中に今も尚語り継がれる。

少年が棺に話しているのは、そんな男の最期の話。

気狂いの王は、ある日突然恋をした。その相手は……なんと、かつて自分が殺めた隣国の姫。十年経っても、二十年経っても、彼女の身体は腐らない。まるで眠っているようなお姫様。

何も語らない彼女は、彼女の品位を貶めることはなく……唯ただ

……光のように美しい。

死んだ人間が、それ以下になることがない。

年月により、記憶は美化され……姫の小言の音はそこから薄れ、

在りし日の笑顔だけが甦る。

自分は何と愚かだったのか。こんな美しい女は世界中の何処にも居ない。王は彼女を殺めたことを心から悔いた。

そして彼女があんまり綺麗なもので、それは死んでいるのではなく眠っているだけだと思ってしまうようになる。

彼女を眠らせているのが毒なら、薬を与えればいい。しかし幾ら薬を与えても彼女は目覚めない。薬は時に毒へと変わり、毒は時に薬と変わる。毒を打ち消すのもまた毒だ。

そう考えた王は、世界中から集めた毒を彼女に与えた。しかし、それでも姫は目覚めない。

為す術を無くした王は、お伽話へと縋り……彼女へ口付けて、そしてぼっくりお亡くなり。

物語にも救いはない。人が生き返るなんてことは絶対にあり得ない。だから人を殺めてはいけない。これはそういう教訓の物語。

少年は、そつと棺の蓋を開けてみる。中には一人の子供が眠っている。花は萎れるのに、その子供は変わらない。お伽話のお姫様そのもの。眠っているように、優しく穏やかに微笑んでいる。何か夢でも見て居るんだろうか。そんな風に思わせる。

少年は、一瞬でもその子供が眠っていると思った自分に呆れて、馬鹿馬鹿しいと顔をしかめて蓋を閉じる。それでも心のどこかで、もしかしたら本当は生きているんじゃないか。そんな非現実的な妄想に取り憑かれているのを自覚する。

手に取るように、少年の心が解る。その葛藤は……彼のものだけではない。それは、彼と自分のモノなのだから。

彼女と交わした約束。大切なその誓い。それはまだこの胸の中にある。

それだけが、今も自分が生きる意味。

「二度と、悲しいことがないように……君が泣かないように……」  
守るんだ。絶対に。この手で、きつと。  
貴方の剣と盾になりましょう。僕がいつか死ぬ日まで。

トーラに指示された場所、それはセネトレア王都ベストバウアー……その東裏町。西裏町で生活している飛鳥にとつて、そうそう足を運ぶ場所ではない。西と東は請負組織としての派閥が違う。西はあのトーラという情報請負組織が仕切った街。東は商人組合子飼いの請負組織達が屯する街。大まかに分けるなら、西は奴隷貿易、混血迫害を拒絶する人間の集まり。東はそれを肯定し、金儲けのために人を売ることを厭わない人間たちの集まり。

勿論裏町と言うだけはあって西裏町だってそれなりには物騒だ。なんたつてこの物騒なセネトレアという国の一部なのだから。物乞いは居るし、強盗もいるし、強姦、殺傷事件くらいならば日常茶飯事。それでもまだ西はマシな方なのだ。

西は殺されるだけ、東じゃ死体さえ残らない。裏町はそんな言葉で語られる。西は金品くらいしか奪われないが、東は違う。人の身体にさえ値段を付ける。臓器や血液、使えるものは全て奪う。金になるものなら全てを持っていく。そんな物騒なのがこの東裏町。そんな破落戸達も、商人の後ろ盾を得ているから好き放題出来る。それが咎められることもない。

元々西はスラム街のようなもの。それを情報請負組織TORAというものが、西を支配し、整え……一応の秩序のようなものを生み出した。それがあんな少女の功績だとは今でも信じられないが、彼女の情報力は確かなものだ。飛鳥の正体まで洗って言い当てた彼女なら、本人を信用できなくともその情報力だけは信じてやっても良い。そう思う。……というよりここまでくるともう藁にでも縋りたい気持ちで一杯だ。このまま宛もなくただどこにあるかもわからないものを探し続けるというのは、とても力が要ることだ。よくそれが9年も続いたものだ和我ながら感心する。それでも同時に、心のどこかでもう諦めている心もある。こんな国だ。原型と留めている

んだらうか？もう失われているんじゃないか？何もかもがもう何処にもない。だから何の手がかりも見つからない。そんな風に感じている。

ただがむしやりに金をかき集めて。それを積み重ねれば、贖えるのだと盲目にそれを信じて金だけ貯めてきた。

そんな弱り切った心にあんな甘い餌を与えられたら、食い付くしかない。それだけのために自分は生きてきたのだ。

(いや……今は仕事に集中しねえとな)

指定された時間より早めに着いた。指定された物陰に身を隠し犯人が現れるのをただ待っただけ。それから何分経っただらう？一時間には満たないはず。

飛鳥の前に現れたのは一人の少女だ。暗がりのせいで正確な髪や目の色まではわからない。それでも身につけている服や髪飾り、そのシルエットからそれが少女なのだと分かる。

「待て！待てと言ってるんだ！くそっ……私の命令が聞けないのか！？」

闇を裂く、低い声。少女は何者かに追われているのか、息を切らしている。細い足で走り続けて……力尽きたのか、とうとう立ち止まる。彼女を追う靴音。それに少女は振り返る。

追ってきたのは一人の男。口からは薄汚い笑い声を発している。

「これで……私の勝ちだっ！はは……はははははは！」

追いつかれた少女は、男に静かに歩み寄る。

「……それなら今より貴方が私のご主様。主様……貴方は私に何を

お望みですか？」

初めて発せられた少女の声。静かに凜と……夜の闇に響く声。とても綺麗な声だけれど、感情の籠もらないその音は、不気味な雰囲気漂わせる。

しかし少女を前にしたその男はそんな風には感じないらしい。抵抗を止めた少女の言葉に、満足そうに男が頷く。望みを果たそうと彼女へ手を伸ばし少女を腕の中へと抱き寄せる。

「……そんなこと、決まっているだろう？」

( 奴隷と飼い主か…… )

これから何が行われるのか、おおよその見当はつく。どうせろくでもないことだ。奴隷を買うような人間は大抵人格破綻者か変態。こいつはその後者だろう。少女は買われたところを逃げ出してきたのだろう。助けてやりたい気持ちはある。しかし、いつ犯人が現れるかわからない。不用意に姿を現すわけにはいかない。

自分の中には優先順位がある。そのためには心を鬼にしなければならぬことだ。あってあるわけだ。見ず知らずの少女のための正義感から、これまで積み重ねてきた情報への手がかり足がかり、それを無に帰すことなどできない。

それでも直視に耐えかねて、目を逸らす。間もなく何か倒れる音。少女が押し倒された音だろうか？それにしても、もっと重い音。目をやれば、倒れているのは男の方だ。少女は二本の足で立っている。

( ……っ!?)

暗がりにはつきりとした色はない。それでも明色暗色の違いは見て取れる。少女の白い頬とか、それにさきほどまでなかった黒い色がこびりついている。

（あれは……血だ！）

少女の手口は鮮やかだ。彼女は何をした？一瞬目を離した。その隙に男に触れられただけ。それだけでもう男は動かない。

（……まさか、あの子が犯人っ！？やべえ完全にノーマーク！色ま  
で確認出来てねえ！）

少女が駆けていく。後を追わなければ。彼女が犯人だ。路地裏に現れた血だまりに横たわるそれは、確かに絶命している。飛鳥はそれを確認した。

どんな手を使ったか。それはあの数術使いから聞いている。毒殺だ。あんな小柄の女が人を殺すには、それぐらいしか方法はない。

（逃がすかよっ……）

あの少女の外見、その情報を手に入れば……トーラの依頼は完了だ。この9年間探し続けた情報が、ようやく手に入る。やっと知ることが出来るんだ。

足音は立てないように、それでも見失わないように少女の後を追う。少女はそこまで足は速くない。難しい仕事ではない。

（つつつても……どうやって見ろって言うんだ？）

少女の色を知るには灯りが必要。けれど此方がそんなものを持ち出せば追ったことが向こうにバレる。しかし飛鳥の不安も杞憂に終

わる。

少女は立ち止まり、その建物の扉を叩く。ギィと重たい音がして、その扉は開かれる。室内から溢れる薄明かりに、闇の中から少女の輪郭が曝かれる。

「また帰ってきたのかい、不良品め。何人殺せば気が済むのかねえお前は。まあいいさ、お上がり。お前にまだまだ稼いで貰えるんならこっちはそれでも構わんからねえ……」

少女を迎える声と共に現れるのは老婆の姿。逆光を背に少女を迎える。

(……よっ！)

物陰に身を潜めていたが、これは好機だと足下に落ちていた石を投げる。その音に、少女が一度振り返る。

「……………」  
「瑠璃椿？」

扉から入ってこない少女を不審そうに呼ぶ囁れた女の声。

「……………気のせいかな」

少女はそう呟いて、扉の内側へと姿を消す。飛鳥はそれを呆然と見つめていた。

振り返る瞬間、光に照らされて輝く髪は白金よりももっと明るく輝く白。もっと冷たい美しさを秘めた銀色の髪。闇を見つめる虚ろな目は今日の夜よりも深い紫。

その二色を目にし、時を忘れたようにそこに佇む。自分はその色

を知っている。ずっと探していた、その色と同じ色。

仕事はもう終わりだ。犯人の色を曝いた。これを報告すればいい。それでお終い。帰るだけ。それなのに、この足は帰ろうとしない。それどころかようやく時を取り戻したそれは、少女が消えた扉の方へ、ふらふらと歩き出している。

(……………時計屋か?)

扉の前には0時で止まった時計が飾られている。それがなにを示すのかは分からない。掲げた手、それが扉を叩くことを躊躇う……………けれど、下ろせもしない。そのままじっとしていることも出来ず、取っ手に手を掛けた。鍵は掛かっていなかった。

「おや、お客さんかい?おやおや……………今日は客入りの良い日だねえ」

「こんな時間にやってる店があるとはな。飲み屋って感じでもないが、ここは何なんだい婆さん?」

「婆なだけに飲み屋じゃなくてバーじゃよ……………なんて言えたらいいんだがねえ。生憎うちでは酒なんか売らないよ。うちの商品はもつと生きが良くて酒の快樂よりも上等な一級品ばかりさ」

飛鳥を出迎えるのは一人の老婆。年を食いすぎて逆に年齢不詳とといった感じの女だ。よく言えばミステリアス、悪く言えば童話に出てくる悪い魔女みたいな感じの老婆。ひひひという笑いと共に口元に浮かんだ笑みは不気味というか軽々しく信用できない類のそれだ。

「んだよ。ようやく開いてる酒場を見つけたと 思った俺の感動を返してくれよ。振られて傷心の俺は酒でも浴びようと思って家中から金引つ張り出してきたのに……………」

「フオフオフオ……………女に振られたかお若いの。相手は見る目がないのお。儂なら即OKと」

言うところ何じゃがのお……お前さんなかなかいい面構えをして  
おる。それに稀少じゃ」

「それがなあ……本命には相手にされないんだ。こつちは目  
に入れても痛くないつてのに……向こうの眼中にも入ってないんだ  
と。それに婆さんにモテてもなあ……」

「しかしお前さん……見たところ女に困っている風には見えない  
けどねえ。その色……あんた真純血だろう？カーネフェルの尻軽女  
共は幾らでもわんさか寄ってくるだろうにねえ……」

「金目当ての女なんて懲り懲りしてるんだよ」

「まあ、良い時に迷い込んだかもしれぬぞ？女の一人や二人、す  
ぐに忘れられる商品がここにはあるからのお……人を傷付けること  
が出来るのが人である以上、人を癒すことが出来るのもまた……人  
でしかないとは思わないかえ？」

(この言い草……まさかこつ、奴隷屋……?)

老婆の言葉から察するに、この場所は奴隷屋らしい。内装はいか  
にもという奴隷屋らしくはなく、まったくそんな風には感じないが、  
それなりに豪華な調度品。それなりに繁盛している店のよう。

「そうじゃの、どんな子が好みかえ？少年？少女？それとも……儂  
？」

「三番目は断固却下で」

「つれないのお。儂的にはお前さんタイプなんじゃがのお。どうじ  
ゃ？奴隷なんか止めてここは儂と付き合わんかい？いや、突き合う  
方向でも全然おっけーじゃよ」

自重しろ婆。いい加減枯れる。いろいろと。

「まあ、8割本気の冗談はさておき……こつ所望の品は？」

それもはや冗談に分類するのが失礼な割合だ。かなり本気じゃねえか腐れ婆が。

内心そう思っても口には出さず、微笑を湛える自分は偉いと思う。割と本気で。

「そうだなあ……カーネフェルの女は駄目だな。金髪も青い目もしばらく見たくねえ。かと言ってタロツクの女なんて俺の金で買えるとも思わないな」

「お前さん驚いた割にあっさりノリノリじゃのう。まあ、それなら心配要らんよ。うちで扱ってるのはタロークでもカーネフェリでもないからのう……」

「純血じゃ、ない？」

「うちは混血専門店なんじゃよ。くくく、穴場も穴場！お前さんも運が良いねえ。ここは混血専門高級奴隷店！寝ける時間も金も必要ない！教養仕込みの宝石箱さあ！」

「へえ、どんな教養教えてるんだい？」

「ひひひっ……そうさねえ。昼間は淑女、夜は過激な娼婦。そばに置くだけでもいい飾りになってくれるお人形さ！」

とことん腐ってやがるなこの国。

しかしどうしたものか。

(混血専門店……?)

ミスったか？混血奴隷なんついたらタロツク女より高価な時もある最高級奴隷。支払い能力不足で追い返されかねない。

一般的に純血奴隷の価格は安い。人種間に生じた不平等な少子化により、人の価値は変動した。タロツク人の男と、カーネフェル人の女の価値は底辺。ダース売りで何万とか、その程度で売買される

ようなご時世だ。それに対してタロツク人の女とカーネフェル人の男は高価。血を重んじる貴族共が咽から手が出るほど欲しがる商品。そしてもう一つの商品が混血。成金貴族もとい変態貴族達の間では混血趣味が流行り、いかに珍しく美しく美しい混血を所有しているか、或いはその数を競い合う悪趣味な風習がこの国で興った。そしてあつという間に混血の価値は高騰。混血は奴隷貿易において、一人数億から数十億の価値が付く。ものによつては数百億だって夢じゃない。そのくらいの金はあるのかと問われている。

「それでお前さん、好きな色は？奴隷を選ぶには、それは勿論顔や相性も必要じゃが、目の色や髪の色も大事。そのあたりから絞ってみては？うちにはそれなりの数の商品が居るから。一匹ずつ会っていたら時間が幾らあつても足りないじゃろう」

「そうだな……銀髪で、紫」

「はて……、今何と言ったかの？」

答える飛鳥に老婆が一度聞こえない振りをする。それにもう一度同じ言葉を繰り返すことを強いられた。

「紫の目の混血っているか？……俺はあの色が好きなんだが市場で今まで見かけたことは一度もないな。もしかしてそんなのいないのか？」

「お前さん、それを何処から聞いてきた？」

老婆はあの少女への探りに気付き、それを咎める……と思ったのだがそうではない。老婆は飛鳥を追い出すでもなく、逆上するでもなく、奇妙なことを言い出した。

「おやおや……お目が高い。片割れ殺しをご所望かい？ゲームの参加希望じゃったらそうと早く言いなされ」

「なんだ、その“片割れ殺し”って」  
「くくく……知らずにここまで来たとは本当に風変わりなお客だね」  
「片割れ殺しは幻の混血のことさね。今まで一人だか二人とか……  
そのくらいしか生まれてない希少価値の塊さあ。みいんな欲しが  
けど需要通りに供給出来ないのは仕方のないこと」  
「おいおい婆さんよ……幻の混血なんて馬鹿高いモノの相場俺は知  
らないぜ？持ち合わせで足りるのか？」

このまま頷いて、わけのわからない話に乗せられても困る。この  
辺りで一度、手を休めるか。

「それが足りるんじゃないよ。ここは賭場。賭けるものさえ賭けてくれ  
れば、それでよし。勝てば無料で商品はお客のものさ。その商品と  
いうのがお前さんの言う、紫の瞳の混血なんじゃ」

「へえ。その参加資格ってのは？」

「いや、この書類に一筆サインをして貰えばそれでいい」

「ええと、このゲームで命を落としても文句は言わない。あと死ん  
だ場合全財産は没収されても構わない……？おいおい酷いぼったく  
りだな」

老婆が差し出す紙にはとんでもない要求が記されている。それは  
命と全財産を賭ける取り決め。

「まあ、そう言うでない。本来この程度でも安いくらいじゃよ」  
「とか言って婆さんが商品だったとかそういうオチはねえだろうな」  
「残念じゃのう……俺はそれでも構わんのにお」  
「斬り殺してもいいか？」

流石にそろそろ痺れを切らしての言葉だが、にたにた笑う老婆に  
かわされる。

「そう怖い顔をしなさんな。婆の戯れ言じゃよ」

「あれは本当に珍しい混血じゃ。普通に買おうものなら億単位でも足りん。もつと価値の付くものじゃ。お客人、お前さんは混血についてどの程度知っているかえ？」

「混血は……男女の双子で生まれることが多い。カーネフェル人とタロック人の間に生まれた突然変異の子供達。髪の色は片親のものを継ぐ場合と突然変異色に分かれる。しかし目の色は絶対に突然変異。……こんなところだ」

「ふむ……まあまあの認識じゃな。しかし正解ではない」

飛鳥の答えに老婆が静かに頷き、それを訂正し始める。

「お前さんは混血が男女の双子で生まれる確立をアバウトに言っておったが、本来それは絶対と呼んで言い割合じゃ。片割れの居ない混血は、迫害などで片割れを失ったに過ぎんよ」

ディジットの経営するあの宿にいる双子の混血、アルムとエルム。あの二人のように混血は片割れと共に生まれるものらしい。それが絶対なのだと老婆が告げる。

しかしそのすぐ後に、老婆は今の言葉と異なることを言う。

「そんな中、絶対から外れた混血が居る。それが片割れ殺しと呼ばれる混血じゃ」

「片割れ殺し……？」

「片割れ殺しは銀色の髪に、唯一の瞳を持って生まれる稀少な混血。その名の通り、片割れは居らぬ。生まれながらの人殺しよ。片割れは死産。その時に生まれるのが片割れ殺し……その罪深さからか、片割れ殺しは他の混血とは比べものにならない程美しい色を持つ。」

誰もが金を積んで欲しがる至高の宝石」

片割れ殺し。そうだ。確かにあの人も……片割れは居なかった。

(まさか……、……あの人なのか?)

あの少女が、自分がずっと探していたあの人なのか?

(でも、そんな馬鹿な……)

だってあの人は……確かに死んでいたはずだ。死人が生き返るなんて、常識的に考えてあり得ない。そんなことがあるはずがない。だとしたら別人? けれど片割れ殺しは稀少……絶対の確立から外れた存在。そんなにそんなものがごろごろ存在しているはずもない。

(それにあの色……)

似ている。とてもよく……似ている。記憶の中で、夢の中で見る人にとてもよく似た色の目。他人の空似? それにしては……似過ぎている。それを確かめる上でも、もう一度彼女に会いたい。ここで引き下がることは出来ない。

「これはそれを賭けたゲーム。命くらい惜しくはないという男気溢れるお客人共が夜な夜なうちの店にやって来るわい。しかし……お前さんは止めておいた方がいいと僕は思うぞ。お前さんほどの色男を失うのはこの世界の損失じゃ」

「あはは……生憎俺の周りの奴らはそうは思っていないんだ」

書類にサインをする。どうせもう死んだ人間の名前だ。それを記して老婆へ差し出す。

「で？そのゲームってのはどんなもんなんだ？俺は何をすればいい？」

命知らずの若者め……馬鹿にするような呆れるような哀別の瞳で見る老婆。

「ゲーム自体は簡単じゃ。あれをそのまま参加者が自分の家まで無事に連れ帰れたなら、ゲームはお前さんの勝ち。あれは勝者の物となる」

老婆がそこまで言ったとき、突然店内の灯り全てが落とされた。灯りに目が慣れていたせいで、何も見えない。その闇の中からひしひしと伝わる殺気。

(……俺が何しにここに来たか、バレてたってことか？)

袖に隠したナイフを両手に構える。夜目が利くようになるまで後手に回ってしまう。油断は出来ない。

風を切る音。その音へ向かってナイフを投げる。殺気があつたから、なんとか読めた。弾き返せた。相手が闇に紛れたら不味い。どうにかして挑発すべきか。

「ん？うちの用心棒の仕業かねえ……高価な商品がおいてあるから神経質になってるんじゃないよ。稀少な商品じゃからのう、盗人も来るじゃろ？」

次の手を考える飛鳥の傍で、老婆が脳天気な声で笑う。

しかしすぐに真面目な口調で老婆が語る。それはその用心棒とや

らに向かつて。

「……真純血だろうと客は客、下がりなさい」

小さな舌打ち。その後には消える殺気。

老婆が洋燈に火を灯し……部屋の灯りを付けて回り、室内が明るさを取り戻した時には用心棒の影も形もない。何処へ消えたのだろう。床にも壁にも用心棒の武器は残っていない。自分が投げたナイフが落ちていいるだけ。

「……しかし見えなくせにお前さん、ようやるのお……ゲームの参加資格は十分と言ったところか」

老婆が満足げに頷いた。

「まあ、ゲームの参加をどうするかは商品を見た後でも遅くはないじゃろ。入っておいで……瑠璃椿」

「……店主、仕事ですか？」

「さあのう、それはお前が決めるんだよ瑠璃椿」

老婆の呼び声に、奥の扉が静かに開く。少女の声。あの闇の中で聞いたそれと同じ声。

「どうだい、お若いの。……フオフオフオ、声も出ないと？」

老婆に笑われるが、その通りだ。声どころか身動き一つ出来やしない。魅入られたように少女を見つめる。それだけが自分に許されていること。呼吸さえ忘れて、少女の奇跡のような色を見つめる。

キラキラと流れるような銀系の髪。夜の闇と光の加減で色合いを変えるそれは淡い月明かりの用の朧気な美しさ。

少女が此方を見ている。紫水晶のような綺麗な瞳だ。いや、あの石にだってこんなに深い色は無いかもしれない。

それでも引き込むような、惹き付けられるような感じがするのは、その色だけだろうか？少女の瞳はとても綺麗だけれど、感情の灯らない瞳。透き通るような虚ろな目。彼女は誰も見ていない。目の前に自分はいるけれど、そこに映れていないのだ。

少女はこちらを見るのを飽きたのか、すぐに視線を逸らす。その仕草に、見られていたとき以上の引力が生まれる。

(俺は、この色を知っている……)

そしてこの感覚も、知っている。

最後に一度、目が合った。そしてそれは閉ざされた。そしてそれが二度と開くことはないとなりながら、もう一度その視線を求めた。それが今ここにある。

人間は欲に突き動かされる生き物。人は本当に自分の意思で生きているのか？それともそれに操られて生きているのか？

目を逸らした彼女に、もう一度此方を見て欲しい。その瞳に自分を映して欲しい。あの日の微笑みをもう一度、この眼に見せてくれ。ふらふらと、足が彼女へ向かい出す。……彼女が視線を少しだけ此方へ上げる。何か言わなければ。

「……なああんた、前にどこかで会ったことがなかったか？」

咄嗟に自分の口から漏れたのは、今時珍しくもないというかとっくに廃れたような口説き文句だ。背後で老婆が吹き出しすのを耳にした。そんな臭い言葉に少女は瞳を瞬かせ、考え込むような素振り。

「前に……あなたと？」

「仮にそれが真実だとしても無駄じゃよ。これには過去など何もな

いからのお……」

老婆が語る。少女には過去がない。記憶がないのだと。

「……貴方は、私を知っている？それ、本当ですか！？」

それまで人形のような無表情を湛えていた少女が、初めてその瞳に感情の色を浮かべた。それは歓喜。

少女の方から飛鳥へ近づく。その手を取って、嬉しそうに、驚いたようにじつとこちらを見つめる、探るような紫。なんて綺麗な色だろう。

感情の火の灯った人形。そのままでも美しいのに、もっと素晴らしい何かへ変化したよう。人形が笑っている。目の前で、笑っている。

(間近で見ると……本当、あの人にそっくりだ)

夢でも見ているのだろうか？これじゃあまるで、あの人そのもの。感動からか興奮からか、顔が熱い、息が苦しい……目眩が……目眩？

「お止め瑠璃椿っ！」

老婆の制止の声。それに少女が我に返って手を放す。

(なんだ？……身体が動かねえ。目が合っただけなのに……)

俺の足は再び自分のモノじゃなくなっただけなのにフラフラと……彼女の方へと引き寄せられる。目をそらす彼女の瞳が見たい。逃げる彼女を捕まえて……そして……

(ちよ、ちよつと待て！何危ないこと考えてるんだ俺っ！そんなこととしてみる！あの方になんて詫びれば……ってそもそも他人の空似って可能性も十分あるってのにくそっ……)

思考が危険な方向へと向かい始める。どうして？わからない。必死にそれを振り払おうとするけれど、そんな思いばかりが浮かんで来る。

頭ではいろいろごちゃごちゃと考えてるのに、それと身体が上手くリンクしていない。別のモノになってしまったよう。一度合わさった目が。一度触れられた肌が。飢えている。見つめて欲しい。もう一度。触れたい。触れられたい。質の悪い薬みたいな依存性。

「……来ないで！私は、貴方を殺したくないっ」

泣いている。彼女が泣いている。

(……あ)

それを見た刹那、脳裏に甦る記憶。優しく慈しむような女性の声。

“もう二度と……泣くことも、悲しむことも無くなるように”

幸せを祈る声。その祈りの向かう先………それを守ると誓ったのは幼き日の自分だ。

目の前で、彼女が泣いている。泣かせてしまっている。自分のせいで。

「泣かないで………下さい」

「っ………！？」

夢だろうか。幻だろうか。それでもいい。だからあなたは、泣かないで。

手を伸ばし、彼女の頬へと触れる。その涙を拭う。せめてこの人を笑わせられたらいいのに、あの人が願ったように。そう思っただけ。彼女は見開いたまま、此方を見ている。伸ばした指先。掌に落ちる透明な雫は温かい……生きた温度。

「もう二度と……あなたが」

言いたいことがあるのに、声が出ない。それどころか伸ばした腕が痙攣し……膝が力を失って……視界が闇に包まれる。それでもまだ意識はある。声が聞こえる。彼女はまだ泣いている。何度もごめんなさいとそればかりを繰り返す。

「残念じゃのう……またお前の勝ちかい。しかし惜しいことをしたカーネフェルの」

「若い男は高く売れたんじゃのう……生かしたまま捕らえたかったわい」

これは老婆の声。あの老婆、そんなことを考えていたのか。やっぱりこの国はろくな人間が居ない。

(くそっ……悔しいが上手く喋れねえっ……)

俺は毒にやられたのか？何時？どうやって？俺は彼女に何をした？

手に触れた。涙に触れた。触っただけだ。それだけ。それだけに、どうして？

(まさか……毒人間!?)

聞いたことがある。

昔、タロツクで貢ぎ物として作られた毒の乙女の話。それで毒殺されたカーネフェル王がいたとか。

(汗に涙も毒なんて……その究極版ってことか。流石にそこまで予想してなかったぜ)

“犯行に使われた毒は“ゼクヴェンツ”。アスカくん、君の大事なご主人様を殺した毒だ”

トーラは言っていた。過去を持たないこの少女が用いる毒はゼクヴェンツ。

(毒人間……ゼクヴェンツ……。それなら、この子は……あの人の  
なのか?トーラの奴……嵌めやがったな)

いや、違う。例えそうでなかったとしても……こんなにそっくりじゃ、泣かせたら気分が悪い。目覚めが悪いというよりは、眠りが悪い。

少女はまだ謝り続けている。泣いている。

「笑って、……ください。……な……、さ……、ま

「あなたが、笑って……くれるなら……俺も」

この子が笑ってくれるなら、それだけでいい。それだけで、自分は救われる。

鳥の囀り。差し込む光。それが重たい瞼をこじ開ける。視点が定まらず、天井を見上げる。

日差しの中で大体の時間は分かった。もう朝とは呼べない時間が今だ。

「もう、昼か。随分長いこと眠ってみたいだな……」

「はい。アスカ様は半日ほど眠っていらっしやいましたので、今は午後の0時と言った所です」

「そうか……なんか良い夢をみたような」

何だか幸せな気分だ。夢が覚めなければ良かったのに。あのままずっとこの眼を閉ざしていたかった。

「……あれ？」

まだ寝惚けているのか？ 独り言に返される声が聞こえる。その声は、夢の中でも耳にしたはずの……

「瑠璃椿っ!？」

寝台から身体を起こし、声のする方を見れば……夢から抜け出てきたままの少女の姿。銀色の髪に紫色の瞳の少女が控えている。

「貴方は賭けに勝ちました。今日より私は貴方の奴隷です。何なりとご命令を……ご主人様」

瑠璃椿が淡々と語り出す。突然のことに頭がついていけない。自分が勝った？ 奴隷？ 主人？ 現実味を帯びない単語ばかりが彼女の口から吐き出されていく。

「な、なんだってそんなことにつ！？ 俺：あれ？ つか俺なんで生きてんだ！？」

「どついう経緯であれ、生きて私を連れ帰った者が勝者ですから」

「そういうこと。おめでと飛鳥君！ それからやほー瑠璃ちゃん、半日ぶり？」

窓から現れる訪問者。依頼人数術使いトーラ。にこやかに手を振って土足で室内に彼女が転がり込んだ。

「何でお前がここにいる……っていかこいつと面識あるのか？」

「感謝してよね。半分は僕が助けてあげたようなものだから」

「こちらの方が解毒をしてくださったんですよ」

「マジで？」

「うん、マジ。大マジかなりマジ」

瑠璃椿にもこの虎娘が恩人なのだと言われては、認めざるを得ない。

「そんじゃ、僕はこれで。仕事忙しいし……ってことでアスカ君、報酬は確かに渡したよ？」

そう言い残し、あっという間に彼女は消える。

「……帰りが数術なら、行きは窓から来た意味あるのか？ つか窓閉めてけよ」

「……しかしこれであいつに貸しひとつ……いやふたつ……か？何企んでても踊らされてやるしかねえじゃねえか……でかい借りだな」

アスカの口からは重いため息。それを心配そうに見ている瑠璃椿。そんな彼女に何でもないから気にするなと笑いかけ……これからどうしたものかと思いい悩んだ。

「もう！何騒いでんのよアスカ、五月蠅いわね」

「げ……しまった！デジタルー！」

デジタルは奴隷商を嫌っている。自分が奴隷を連れていることがバレたなら、これまでのフラグが一気におじやんだ。いや、元々一本も立っていないかもしれないけれど、人としての信用とかまで無くしてしまう。

「瑠璃椿っ！戸締まりは！？」

「一応窓も扉も施錠をしておきましたが……」

「よし！でかしたっ！」

しかしそれでも窓から入ってくるあの数術使用は何なんだ？やっぱり化け物か？

いや、化け物は何も混血に限った話ではない。

ドアが蹴破られる音。吹っ飛ばされる。部屋の中央まで跳んできた扉だった物に僅かの哀愁の念を覚えつつ、おそろおそろ扉の方へと視線を向ける覚悟を決めた。

「む、無意味……だったみたい、ですね」

瑠璃椿がぼつりとそう呟いた。その呟きが大きく響くのは、嵐の

前の静けさ。部屋が静まりかえっていた証拠。

「で、ディジット……」

「あら、可愛い子ね」

ディジットが笑っている。笑っているけど怖い。これは女性にしか習得できない特技だろう。そんな気がする。笑いで人を震え上がらせるのは彼女たちの才能だ。出来ればこの地上から消えて欲しいようなそんな才能だ。

「その子……タロークでもカーネフェリーでもないように見えるのだけれど私の気のせいかしら？どうなのかしら？」

「ででででディジット！こ、これには深いわけがっ！」

「あんたじゃ話にならないわ。ねえ、君……こいつに何かされてない？大丈夫？」

飛鳥の方はゴミ虫を見るように冷ややかな視線。瑠璃椿には労り同情、それから慈愛に満ちた優しい視線を送る彼女。

「むしろされたのは俺の方なんだけどな」

「うっさい！黙れ！変質者！寄るな変態っ！鬼畜！人でなしっ！信じられないわアスカ！私の目の黒い内に奴隷商に荷担するなんて！こんな子どこから攫って来たのよ！？最っ低！」

「いえ、私は攫われたのではなく……」

「奴隷屋から買った！？はあっ！？あんたそこまで堕ちてたの！？いくら私が振ったからって奴隷売買に手を染めるなんて……不道徳だわ不潔だわ！今日限りでここ出て行って！」

「ででででディジットの目は黒じゃなくて青だよなあ……なんちやって」

「ぶつぶ、そうね。で？遺言はそれだけ？」

「だ、駄目です！」  
「瑠璃椿？」

デジタルの罵声を甘んじて受けている飛鳥を庇うよう、二人の間に立つ瑠璃椿。両手を広げ、自分よりも大きな体を守るように立ちほだかった。飛鳥からは差し込む光に照らされた、彼女の銀色しか見えない。

「アスカ様は私の主です。危害を加えるのなら……」  
「止めてくれ瑠璃椿っ！」

遺言と言言葉。それはデジタルから飛鳥への殺害予告。その奴隷である自分に対する宣戦布告と受け取ったらしい瑠璃椿。

デジタルは確かに怒っているが、飛鳥を殺したりはしない。それが瑠璃椿にはわからない。だからここで止めなければ、彼女は彼女に危害を加える。

「それが貴方の命令ですか？」

振り向いて、虚ろな瞳で語りかけてくる瑠璃椿。

「止めてくれ……」  
「わかりました、アスカ様」

「訳あり……だったのかしら？」

危うい瑠璃椿と、それを止める飛鳥。そんな二人の様子を見ていたデジタルは、また飛鳥が厄介毎に首を突っ込んだか巻き込まれたのだと理解する。

「ああ、そんなところだ。仕事の関係上預かってるようなもんだよ」  
「……あらやだ、私っいたらてつきり。あはは……ごめんねアスカ」

\*

「いや、一時はどうなることかと思ったよ」

外れた扉を直し、飛鳥はようやく一息ついた。

ここを追い出されたら新しい住処を見つけるまで路頭に迷うところだった。自分だけならまだしも、瑠璃椿もそれに巻き込むことになっていたかと思うと、ディジットの誤解を解くことが出来て本当に良かった。

落ち着いてみると、いろいろ気になることや聞きたいことが表に現れる。でも、そのどこまで尋ねて良いものだろう。主である飛鳥が命じれば彼女は一から百まで話すだろう。でも……話したくないことまで、話させたくはない。

(どうしたもんかな)

「アスカ様、私は普通の人間ではありません」

黙り込む飛鳥の心を察した彼女が、口を開き自分を語り出す。

「昨晚アスカ様を昏倒させたのは私の毒…… おそらく私の涙に含まれる成分が皮膚から進入したのでしょう」

涙……確かに触れた。やはりあれが原因か。

「……涙だけではありません。私の体液は全てが人殺しの猛毒。迂

闇に私に触れることは今後お控え下さい。命に関わります」

淡々とそれらを事実として語る彼女。顔色一つ変えずに自分は人間ではないと口にする。その様子に、胸が痛んだ。

何も思わないわけではないだろう。何も感じないなんてこともないはずだ。

それを押し殺すことに慣れてしまった、奴隷の仮面が哀れ。その境遇に突き落としたのがこの手かも知れないと……そう思うと、両手の震えが止まらなくなる。それに気付かれぬよう、素知らぬ顔で……話題を変える。

「なあ、結局あの店って何だったんだ？唯の奴隷屋とは思えなかったぞ？」

「……… 奴隷屋午前0時は暗殺組織です。標的は貴族と商人。私という餌に食い付く程度の人間が対象です」

「そういえばお前…… 過去がないって記憶喪失ってことなのか？」

「…… 覚えてるには覚えていることもありますが…… 其中でアスカ様らしき人物の心当たりはありません」

「…… そゃあ、まあ…… な。俺が同じ色の人間を 見たことがあるっただけで…… そっちが俺を認識したとは思えないしな」

「…… では、他の方なのかもしれませぬ。すみません、アスカ様」  
「どうしてお前が謝るんだ？」

「だって…… 貴方はとても。その方に会いたくて仕方がないように感じました。私という紛い物が貴方のすべきことを邪魔だてしているのではないかと…… そう思ったんです」

「…… そんなじゃねえさ。乗りかかった船だ。記憶が戻るまで面

倒見てやるよ。俺は請負組織アンダーテイカーだしな」  
「請負組織？」

「体のいい何でも屋ってとこだ。記憶探しの依頼……あんたが望むんなら手伝うぜ？どうせ……しばらく暇してるんだ」

トーラがああ言う以上、こいつは何かある。他に手がかりもないし、それに何より……

(やっぱ……ほっとけねえし)

やはり他人とは思えないのだ。

「……ですがアスカ様。私は奴隷なのにそれではおかしいことになってしまいます。私が主人の手を煩わせるなど奴隷にあるまじき……」

「……俺がそうしたいんだ」

彼女の思考回路を読み、逃げられないよう言葉を選ぶ。思想の自由を与える振りで、袋小路に追い詰める自分はこの上なく卑怯で汚らしい人間だと思わなくもない。一応、自覚はある。自分が奴隷だと言いつ張る彼女。それに主の俺が強く意見すれば彼女はそれを飲みざるを得ない。

命令しないために命令しなきゃいけないなんて、酷い矛盾だとは思っけれど、他に方法がない。

でも、違うんだ。これでいいんだ。

命令するのは俺じゃない。……あなたの方なんだ。俺はあなたの力になりたい。今度こそ、あなたを……あの方との約束を……

「……覚えてる中で一番古い記憶って何年前辺りだ？」

「……1年前です」

そう語る瑠璃椿の瞳は、もっと空虚さを増したように見える。

「私は欠陥品です。………最初の主だった人をこの手にかけていた。血だまりの中目を開ける………それが最初の記憶です………私はその時から人殺し。それ以外の自分なんて………何も」

それはどんな思いだろう。覚えていること、その全てがそんな記憶。始まりも今もそれだけ。前も後ろも罪ばかりが転がっている。そんな記憶の中に暮らすのは、とても辛いことだろう。

代われるならば代わってやりたい。だけどそれが出来ないなら、せめて彼女を支えたい。力になりたい、そう思う。

「………そっか。辛いこと思い出させて悪かった。それで瑠璃椿。お前は………いや、君は………過去を取り戻したいと思っているのか？」  
「………どうして私はこうなってしまったのか。知りたくないと言えば嘘になります。ですが私は奴隷、道具です。………思うことは許されようと、自分の考えで何かをするということは存在意義に反します」

「そんな言い方………君だって人間だろ？」

「………違います。私は奴隷です。そして………人殺ししか芸のない殺しの道具です」

「ですから私に何をさせたいかは貴方が決めて下さい、飛鳥様。それが主というものです。」

貴方が命令すれば、私は全てを受け入れます。私は奴隷ですから

言葉は届かない。彼女は自分が奴隷であることを、それを望んでいるようだ。彼女は人になりたくないのだ、それを受け入れられない

いのだ。だから、言い方を変えなければならぬ。

「……じゃあ瑠璃椿、命令だ」

「はい」

「……俺を主と呼ぶな。自分を奴隷とか道具とかのも禁止だ」

「……それは……困ります」

人形のようにだった彼女の顔に戸惑いが生まれる。

「私は奴隷です。過去がない……今しかない、殺人鬼です。私が私であることをやめたら……私は私の持つ今を……たった一つの持ち物さえこの手からなくしてしまいます」

やればできるじゃないか、褒めるように彼女の頭を撫でるように軽く叩いた。それに彼女が驚きながら此方を見上げる。何をされているのか、何を言われているのか分からない。そんな表情で。

「……ほらな、ちゃんと言えんじゃないか。言っただけなんだ。俺が許す。……やりたいことがあるならそう言え。嫌なことがあるんなら嫌だつて言え。奴隷にだつて口はあるんだからさ」

「……アスカ……様」

「アスカでいいって。様付けなんか慣れてねえからむず痒いって。

……それで瑠璃椿。君はどうしたい？」

主の命令に、奴隷である彼女は逆らえない。自分の中で希薄になっている自分の意思を……それを必死に言葉にしようと彼女は奮闘する。それが命令ならば、彼女はそうせざるを得ないから。

「私は……私がどうしてこんな身体になったのか……どうして奴隷になったのか。過去を……自分を取り戻したい……です」

こぼれ落ちた言葉。それが彼女の意味。

「“瑠璃椿”と呼ばれる度……それは違うのだと否定したいのに、私にはその記憶がない。

言葉がない。だから私は瑠璃椿。奴隷で、道具で、人殺し。過去を知ったからと言って、何かが変わるとは思えない。私は、何も変わらない。それでも……私は理由が欲しいんです。説明できない理不尽……それを唯受け入れるのはとても……苦しいことですから」

吐き出される言葉は苦しげ。自分の何もかもを否定したくて堪らない。大嫌いな自分というものから逃げ出すことが叶わないなら、それを受け入れるだけの理由が欲しいと彼女は願う。

「その名前、嫌いなのか？」

「等号で結びつけられるはずもないもの。それを縛り付けるものが名前です。けれどそれを自己と認識することで、存在証明としていくこともまた事実……好き嫌いで測れるようなものではないのだと思います。縛められていて、突き放したいのにどこかで縋っているのかも」

名前とはそういうもの。それは自分ではないのに、自分だと決定づけられる烙印。それでもその数文字と、人は人生を共に歩む。切っても切れない関係。

名とは一つの支配の形だ。名付けられた人間は、その支配者から逃れることは出来ない。彼女は未だにその名に引き摺られている。囚われている。

彼女の意味が自分を奴隷としてあることを望み、人としての自分を認められないのなら……それならせめて、名前だけでも自由になっても、人間になってもいいんじゃないか？

「……なあ、じゃあ別の名前で呼んでも良いか？」

「どうぞお好きなように、アスカ……」

「……リフル」

「リフル……？」

彼女に告げた名前。そう名付けるのは、自分のエゴか？矛盾しているのかもしれない。彼女があの人でないのなら、自分は彼女をその代用品としてしているのだ。自由にするどころか、縛り付けようとしている。そうじゃないのか？

それでも、この名前は自分だけのエゴではない。祈りだ。彼女の想いがそこにある。それを伝えることが、今日まで自分が生きてきた意味、。

瑠璃椿があの人でなかったとしても……彼女を助けることで、少しは自分が犯した罪を償える。償ったつもりになれる。そんな押しつけがましい自己満足に過ぎないのかもしれない。それでも彼と同じ色の彼女をそう呼ぶことで……救われる気がするんだ、少しだけ。

「……いい名前だろ、俺の兄弟の名前なんだ」

「アスカには、兄弟がいるんですか？」

「……今はいねえな。こんな場所で暮らしてるんだ。親も兄弟もいるわけねえさ」

「……誰にも呼ばれる前に死んじまった、弟の。可哀想な名前だろ？貰ってやってくれるとあいつもきつと喜ぶ」

何も知らない瑠璃椿。この少女は主から与えられたものを、とても嬉しそうに受け取った。形のない物。それでもそれはアスカから初めて贈られた物。見えないそれを愛おしげに呟き、彼女が微笑んだ。

「……ありがとうございます。それなら……頂きます。私は、今日から……リフル、ですね」

その微笑みに、胸が痛むのは罪悪感か。いや、それでも彼女は喜んでいてくれる。それなら別にいいじゃないか。そんな風に思う自分を心底嫌悪する。

ただど彼女が笑うから、それだけで釣られてしまう。救われたような錯覚に陥る。

「ああ、よろしくな！リフル」

「はい！アスカ様！」

「様止めれ」

「あ……」

錯覚でも何でも、今の自分は彼女という存在に救われていた。この糞つたれた現実に行って来た夢か幻のように儂い人を、守りたいとは思うのだ。例え彼女が彼ではなかったとしても。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4966m/>

---

悪魔の絵本1 魔術師【逆】 SUIT編?【完全版】

2011年10月5日17時26分発行